



夜の思考

星野廉



目次

夜の思考、昼の思考 *	3
直線上で迷う夜 *	7
自分の顔が見えないと感じたのはいつなのか *	13
しかめっ面恐怖症 *	19
ここはどこ？ *	29
夢のような映画、映画のような夢 *	35
知らない人 *	41
もう、そうなのかもしれない *	47
VRで自分に会いにいったその帰りに *	53
あやしい動きをするもの *	59
移動しながら静止している *	65
直線で切りとって分ける *	75
指が知っている、体が覚えている	

*	81
「似ている」だけの世界	
*	91
曖昧な顔	
*	97
やっぱり見えます。	
*	103
もののあらわれ	
*	107
痛みをつたえる名文	
*	115
漢字の顔と表情	
*	121
「はかる」と「わかる」に囲まれて生きる	
*	127
あいまいでやさしい境	
*	133
数学の修辞学	
*	139
「思い」を「はかる」	
*	145
知ではなく痴にうながされて書く	
*	151
正方形と長方形で悩む夜	
*	159
夜になると「何か」を手なづけようとする	
*	165
夢にうつるまでのあいだ	
*	171
架け橋	
*	177

夜の思考、昼の思考

＊

ここはどこなのでしょう。

考えれば考えるほど不明になります。PCの前にいる、家の居間にいる、住所を番地まで付けて口にしてみる、地図で見当をつけてみる。いまは、住所をグーグルで検索するとストリートビューでこの家の様子が映像として出てきます。

ストリートビューは面白いですが、考えようによっては怖いですね。いろいろな意味で恐ろしくなります。画像を操作していると、写真が地図になったり、その縮尺を自由に変えたり、さらに拡大すると上空から見た写真になります。

世界地図や衛星写真や地球儀で、ここは、このあたりかなとポールペンの先でこつこつと突いてみる。ここは日本国にある〇県〇市〇町〇番地。ここは地球。ここは太陽系。ここは銀河。ここは宇宙。

〇県、日本国、地球、太陽系、銀河、宇宙——広くて大きな「そういうもの」は、言葉でしか知らない「何か」であるはずなのに、その存在が事実だと言われている。その「何か」をどんどん「広く」「大きく」していくと、それにつれて抽象度が高くなる気がします。

広く大きくなるほど、体感では容易に確認できないものになり、どんどん遠ざかっていくのです。

恥ずかしい話なのですが、いまだに天動説を信じています。

子どもの頃には太陽や月や星が動いていると信じて疑いませんでした。まして地球が丸いなんて思いも考えもしませんでした。

いまはどうかといえば、揺れています。その時の気分で地動説と天動説のあいだを行ったり来たりしているのです。地球が丸くて太陽の周りをまわっているという話は学校で習って知っていますが、どうしても地動説が体感できません。そんなわけで、二つの説のあいだでいまも揺れています。

そもそも「太陽」はぴんときません。お日さまです。「地球」は地が丸いという意味ですけど、これもしっくりしません。せいぜい地面ですが、これだと平べったい感じがしませんか。

お日さまが、東から上り、西に沈む。夜のうちに、地面の反対側をまわるような形で、地球の周りをまわっている。そう感じられます。これが体感というものなのでしょう。

いや、本当は地球のほうが太陽の周りをまわっているのだ。そう学校で習ったのだから、そうなのだ。うんうん。これが昼の思考です。恥とか外聞とか世間体に縛られているのが、昼間の自分です。

夜になると、まして夜中に目が覚めたときには、恥も外聞も世間体も気にしない境地にいるので、堂々と天動説を信奉しています。これが夜の思考です。

人は子ども時代に天動説を信奉し、やがて地動説に改宗するが、その後も密かに天動説の信者でありつづけるとも言えそうです。

さらに言うと、人は夜には子どもになります。夜は体感が人を支配するからでしょう。退行ですか？ そうかもしれません。いや、そうにちがいません。寝るにはまだ早そうです。

直線上で迷う夜

＊

初めて水面や鏡を見たときの、人類という意味での人や個人としての人のようすを想像すると軽い目まいを覚えます。びっくりしたでしょうね。ぶったまげたでしょうね。鏡像に慣れ親しんでいるいまの人や自分の想像をこえた体験だといえそうです。

その体験を「見る」という言葉で片づけていいのか、はなはだ疑問です。本当に「見た」のでしょうか？　そもそも「見る」余裕などあったのでしょうか？　寝入り際にとりとめのない思いにふけると、そういう空想をよくするのですが、寝際ですからぜんぜん論理的な思考（お気づきのとおり、私のもっとも苦手とするもので自分にはないに等しいと感じています）は働いていないもようです。

＊

昨夜は写真機や写真が発明されて間もないころの人たちがどんな反応をしたかなんて考えていました。真剣に考えると目がさえてしまうので、肩の力を抜いて思いをめぐらしていたのですが、次のようなことを思いました。

ひょっとして、枠に気づいたのではないかと。

古い写真機のファインダーに相当する部分から覗きこんで、被写体のうつり——これは「写る」なのか「映る」なのか分かりません、寝入り際には辞書や用字用語集はつかえないのです——ぐあいを確認するさいに、枠があることに気づいたのではないのでしょうか。現像した写真にも枠がありますね。

絵も洞窟の壁や地面に描いていたときには、枠は意識しなかったと想像しますが、板や布や紙のたぐいのうえに描くとなると、端っこがあるわけで、それが枠になりそうです。ああ、視界には枠があるんだ。そういう言葉で思ったかどうかは知るよしもありませんが、自分の目の視界や視野というものを感じた、つまり初めて意識したのではないのでしょうか。

＊

いま自宅の居間にいる私は自分の視界を意識しようと努めているのですが、その視界がどんな形をしているのか、さっぱり見当がつきません。みなさんはどうですか？ 横長であるという気はしますが、長方形だという感じはありません。横に長い楕円形みたいにも感じられます。

そう考えると、映画やテレビやPCの画面に似ていますね。本は縦長ですが、見開くと横に長いようです。昔の巻物もそうでした。人の頭というか意識の中には長方形の枠があるのではないかと疑りたくなります。それをなぞるといふか真似て、物をつくっているのではないか。私たちは長方形に囲まれていませんか？

生まれたばかりの赤ちゃんは、囲いといふか長方形の枠の中にいます。そのあともたいていほぼ長方形の枠の中にいつづけます。家、建物、道路、乗り物、PC、スマホ……。人が亡くなると長方形の棺といふ枠に入ったまま長方形の炉といふ枠の中でくべられ、骨壺（これを入れる箱は縦に長細くないですか？）とか墓といふ枠に収められます。めちゃくちゃ言ってごめんなさい。

人は自分（あるいは自分の中にあるもの）に似たものをつくり、しだいにその自分のつくったものに似てくる、似せてくる、とつねに感じているのですが、人は「自分のつくったもの」に「自分もどき」を見て初めて、「自分そのもの」に気づくのではないか、なんて考えてしまいました。

そのひとつが長方形の枠ではないでしょうか。

＊

人は自分が「どう見ているか」とか、自分に「どう見えているか」が分からないのではないのでしょうか。たぶんいまも分からないし、きっと昔々も分かっていた、のでは？

「見るためのもの」（視覚を補うもの）をつくって初めて、「自分がどう見ているか」とか、「自分にどう見えているか」に気づく。そんな気がしてなりません。ただし「気づい

た」けれど、「分からない」は続いているのです。

鏡、影、落書き、絵画、写真、映画（影や幻影の進化したもの）、テレビ、動画、VR。これほど人が「見る」に取り憑かれているのは、じつはいまだに「見えていない」からであり、その不十分な「見る」を補助するような物や仕組みや枠組みをつくるたびに、思いがけない、つまり想定外の「見る」や「見える」を見てしまい、驚き、ぶったまげ、何かにはっと気づく。そんなことを繰り返してきた気がします。

そう考えると、「見る」というのは「とりあえずつくった言葉」であり、その「見る」について、人は何も分かっていないのではないかというふうに思えます。「見る」「見える」という言葉をつくったから、「見る」「見える」んだ、うん、そうだ、と「決めた」とも言えそうです。

なにしろ、人は「○△X」という言葉をつくって、その次に「○△Xとは何か？」と問い、思い悩む生物なのです。考えれば考えるほど、自分に当てはまります。いまもやっていますね。

*

ここまでの文章を読みかえしましたが、なにぶんにも、寝入り際の思いを言葉にしたものなので、論理的ではないし——やっぱりねという感じ、この記事（小説のつもりなのですけど）のタイトルをご覧ください、正気の沙汰デーナイト——、とりとめがなく、飛躍も多いのに気づきます。じっさいには、もっととりとめのないものだった気がします。

イメージとしては長方形のお化けみたいな細長い道を迷いながら歩いているような——直線は迷路だという意味のことを書いたのはアラン・ロブ＝グリエについて論じていた蓮實重彦だったか——、えんえんと続く長方形の巻物とか、どンドンスクロールしながら読みすすむ液晶の超細長の画面を閲覧しているような気分なのです。

やはり直線をたどっていても右往左往はあるし停滞はあるし迂回はあるし迷います。直線をたどっているつもりとか直線上にいるつもりがそうではないというのは、日常的に経験していることなのかもしれません。本を読んで学んで嬉々として人に報告するような話ではないという意味です。学ぶのではなく気づくたぐいのものなのでしょう。

しかも、この気づきはぼーっとしているときに誰でも得られる気がします。そして忘れるのです。その繰り返し……。知っている必要などないと体が知っているのかも知れません。

知というよりも痴、知るといふより痴れる、知れるではなく。かつては知ると痴れるが同じだったなんて、しれっとしたしたり顔で言うつもりはなく、いまも知るは痴れると同居している気がします。知、痴、稚、恥。自分を基準にして人類を語るようなことを言って、ごめんなさい。この種のことについて観察できる人類が自分しかないのです。

直線と四角だらけの四角い乗り物に乗って目の先だけは直線に見える四角くない世界という迷路をうろちょろする。直線と四角だらけの四角い建物の四角い部屋にいて直線と四角からなる世界を思考する。直線と四角からなり、四角い枠のある、窓、紙、ノート、書物、端末の画面から世界を見つめる。自分の中と外とが角と直線で重なるかに思える。

きっと直線も四角も抽象なのでしょう。四角の中において直線に沿って進みながら、または運ばれながら迷う。あなたも、私も……。話が堂々めぐりになってきました。やはり、ここも（ここって、どこ？）角のある枠の中のようなのです。枠の中にいると思うことで安心して眠れる——ようやく眠れそうです。

自分の顔が見えないと感じたのはいつなのか

＊

○

自分の顔が見えないと感じたのはいつなのか——正確に言うと、鏡に映る自分の顔のことなのですが——、よく覚えていません。以前にそうした意味のことを文章に書いたことがあり、その日付を見ればわかるのですが、あえてしないでいます。

こういうことが自分だけに起きるのか、それともそう感じる人がいるのか、不明なままです。

＊

人の顔を見分けるのにどちらかという苦労する私ですが、鏡で見る自分の顔ほど分からないものはありません。見ているのに見えないという気がします。刻々と更新しつつある「いま」であるとか、刻々と更新しつつあるズレであるとかいう、苦しまぎれのレトリックをつかったことがあるほどです。

つまり目の前にある鏡を覗きこんだときに見ているのは形（自分の姿）ではなく「とき」（自分のイメージ＝心象）であるという意味なのですが、もしそうであるなら、自分はかなり動揺し困惑しているにちがひありません。他のものを見るのとは異なる次元にいたいというくらいのお話なのです。

＊

もしかすると、この困惑は鏡の中を覗きこんだときにそこに映っているものの名前はもちろん、言葉が浮かばないことと関係があるような気がします。自分の名前という意味ではなく、鼻とか口とか眉とかほくろとかそういう各パーツを指す言葉がっさいない世界に放りこまれているという意味です。

夢の中と同じく鏡の中には名前がないのです。そこには意味もない気がします。というか、そういう心境におちいっているのかもしれませんが。「見覚えがある」とか「見慣れたものがある」感じなのですが、無名の世界なのです。

名前のないことが不安にさせるのかもしれませんが。それが夢とのちがいです。名前はなくても、夢の中ではこの底知れない不安を覚えた記憶はありません。



人にとって基本は「似ている」であり、「異なる」は「同じ」や「同一」のように学習した知識であり情報、つまり教わったものではないでしょうか。そもそも「同じ」や「同一」は、そこそこ精密な器具や器械や機械をつかわないと人には確認できません。

詳しく言うと、人にとっては「似ている」と「その他もろもろ」という印象だけがあり、「その他もろもろ」は、「似ていない」でも「異なる」でもなく、むしろ「見えても気に掛けない」とか「見ていない」とか「見えない」とか「気づかない」という感じ、です。

(人は基本的に印象の世界に生きているのです。生まれてそんなに経っていない赤ちゃんを想像してください。)

で、「その他もろもろ」というのは、いわば「見ようとすれば、怖くて不気味で見たくない」ものなのですが、この場合には人は「手なずける」ためにとりあえず「名付ける」という手段に出ます。

「見てもわからない」場合もありますが、気掛かりになるとちゃんと見て、つまり観察して「分けて」、やはり手なずけるためにとりあえず名付けます。ただし、「分けた」段階で「分かった」と「決める」という早合点がほとんどなようです。

なにしろ、人は「○△X」という言葉をつくって、その次に「○△Xとは何か？」と問い、思い悩む生物ですから。現に、いまもお悩みは続いていますね。

「分けた」段階でそそくさと名前を付けて、とりあえず「異なる」が決まるとも言え

そうです。こう考えると事物を分けて事として認識し、即座にそれに言葉を与えているという意味で、「異なる」は「事（に）なる」であり、同時に「言（に）なる」なんて気がしてきましたが気のせいでしょう。

＊

強引な例を挙げて恐縮ですが、見た目にはよく「似ている」柴犬とキツネが動物という点では「同じ」でも「同じ」種類ではなくて、つまり「異なる」種類であり、一見してぜんぜん「似ていない」ドーベルマンとポメラニアンが「同じく」犬であって、キツネとは「異なる」というのは、教わって知った知識だと言えば、お分かりになるでしょうか。

その意味で知識や情報は抽象であって、体感でも印象でもありません。

純粹に「似ている」世界にいるヒトの赤ちゃんは、ヒトが決めた決まりである「同じ」と「異なる」を学習しながらヒトのおとなになっていくと言えます。生まれたての赤ちゃんには、たぶん急須と湯飲みの「違い」も、玩具と動物の「違い」もわからないでしょう。というか、「知らない」でしょう。

万が一、ヒトの赤ちゃんがオオカミやコビトカバに育てられたら、いま述べた「違い」は「見えても見えない」とか「見えても気に掛けない」のではないかと私は想像しています。ひょっとするとどちらもが「似ている」なのかもしれませんね。

「見る」は「見る」でも、「見える」は「見える」でも必ずしもなくて、見ない、見えない、見損なう、見損じる、見間違う、見誤る、見逃す、見外す、見過ごすと同時に並行して起きている気がします。「見る」は「見る」なの、すごくシンプルなわけ、なんて言い切る勇気が私にはありません。

しかめっ面恐怖症

＊

しかめっ面恐怖症

テレビをつけた瞬間に、ぜんぜん見たこともない人の顔が大写しになることがある。顔を思いきりしかめていて、それが号泣しているのか爆笑しているのかとっさに判断できないことがある。

字幕とか音声の解説を聞いて初めて状況がつかめる。それまでは、宙づり状態に置かれる。どっちなんだろう？ けっきょく、泣いているのか笑っているのか不明なまま、画面が変わるなんてこともざらにある。

その人の涙の意味もメッセージも、私には分からないままで終わってしまう。他のどれだけの人が分かったというのだろうか？

＊

歌を歌っている人が、いきなり顔をしかめる場合があるが、私はあの瞬間が苦手だ。怖くなるのだ。こんなことを感じるのは私くらいかもしれない。

もし、しかめっ面恐怖症というものがあるのなら、それは私のことだ。

よくテレビで見るミュージシャンで、サビのところに来ると思いきり顔をしかめる人が何人かいるのだが、ついついその映像を見てしまう自分がある。

まさに怖いもの見たさ。

＊

来るぞ来るぞ……。

来たあ！

そんな感じで見ているわけだが、なんで見てしまうのだろう？

しかめっ面に慣れようなんて殊勝な気持ちからだとは思えない。やっぱり怖いもの見たさに近い心理だという気がする。

それだけではない気もする。

*

あと、最近、スポーツ選手がパフォーマンスの直前に、大きく口を開けた後に歯を食いしばるような顔芸を一瞬だけするのをよく見掛ける。あれも気になって仕方ない。

めちゃくちゃ顔をしかめるのだ。くしゃくしゃなほど。

どのスポーツにも見られる。お相撲さんの中にも取り組みの前に必ずやる人がいる。

気合いなのだろうか。ルーティーンなのか。おまじないっぽい気もする。あれは立派な瞬間芸だと思う。どれも似ている。

初めて見たときには、びっくりしたし心配もした。どこか痛むのかとか、外れかけた入れ歯を直しているのかとか、いろいろ想像してしまった。

*

しかめっ面は喜怒哀楽ぜんぶでありえる。ということは、どれでもないとも言える。

赤ちゃんなんてしょっちゅうしかめっ面をしていないだろうか？ しかも喜怒哀楽ぜんぶ。どっちとも言えないときもあるし。

おとなでも本人が分からないままにしかめっ面をするというのも、よくある気がする。

メッセージは見た人が決めるのかもしれない。誤解があっても、たいていはそのまま進んでいく。何が進んでいって、世界が、そして人生が。

未配、誤配、遅配、消失、隠滅、無視なんて、当たり前。行き先不明で、ひたすら進んでいく。

行先不明、正体不明、意図不明、意識不明、意味不明、原因不明、出所不明。それが世界、それが人生。

しかめっ面にならないほうがおかしい。

顔をしかめる表情が世界中でシンクロする

朝の連続テレビ小説をほぼ毎日見ているのだが、あのドラマはよくできていると思う。とても分かりやすいのである。

表情や仕草や身振りを含めた演技が、型にはまっているからかもしれない。いい人、悪い人、普通の人も、顔で分かる。

また連載が変わるごとに話が変わっても、どこか似ている気がするのだが、そうした定型っぽさが分かりやすさにつながっているように思える。

演技も表情もどちらかというと大げさだ。

中途難聴者の私はテレビを字幕で見ているにもかかわらず、演技が大げさなせい、字幕なしでもストーリーや状況がつかめて助かる。

*

このあいだ、過去の朝の連続テレビ小説の再放送をたまたま目にした。いまのものよりも、ずっと大げさな演技をしているのでびっくりした。

しかも、状況や筋がめちゃくちゃ分かりやすい。初めて見たのに。途中から見ているのに。

分かりやすすぎて、感動すらしていた。こんなに分かっていいのかしら――。

そのときに気づいたのだが、どうやら私はテレビを見ながら、注目している人の表情を真似ているようなのだ。

*

しかめっ面を目にしたときに、自分も思わずしかめっ面になっているのは薄々気づいていたものの、表情一般に言える自分の性癖だとは知らなかった。

いま思わず性癖という言葉をつかったが、性癖と言ってかまわないのだろうか。

それ以来、自分のその「性癖」が気になって仕方ない。気がつくと、ニュースで見るキャスターや政治家、お笑い芸人、アイドル、アーティスト、アスリート、俳優、観客、一般の方々を問わず、その表情を真似ている自分がいる。

つい合わせてしまうのだ。もちろん、気になって目にとまった人に。

これをシンクロと言わずして何と言えればいいのか。

*

ニホンザルもゴリラも台湾カニクイザルもしかめっ面をする。しているのを、この目で見たことがある。

犬と猫については……。よく分からない。もっと観察を続けてみよう。

あ、してるわ。

しかめっ面ではなく、あくびのこと。

ワンコだってニャンコだってハムスターだってあくびをする。この目で見たことがある。

あ、そうだ、サルやゴリラがしかめっ面をするのに気づいた。というか、これも、あくびのことなのだ。

あくびは立派なしかめっ面ではないだろうか。

しかもうつる。うつるんです。

昔、ハムスターのあくびがうつったのを思いだした。ワンコでもあった。生きものに等しく「うつる」現象なのではないか？

あくびは時空を超える。テレビのニュースで相撲を見ていて、客席の人のあくびがうつったこともあった。

あれは中継ではなかったので、やっぱり時空を超えていると考えられる。この現象が私だけのことでなければ。

意味やメッセージが不在か保留されたまま、表情や身振りが反復される

世界中でしかめっ面がシンクロしていることは確かだろう。

まさか同じ意図で同じメッセージを送っているなんて考えられない。しかめっ面はニュートラルなのだ。意味やメッセージは決められないという意味。

どっちかずでどっちなのかも分からない。意味やメッセージが不在ということもおおいに考えられる。

しかめっ面だけではないのかもしれない。

ありとあらゆる表情、目つき、仕草、身振りが、いわば「実物のない複製」であり、「起源のない引用」だという気がしてきた。

ややこしい言い回しだが、決まり文句やオノマトペをイメージすると分かりやすいかもしれない。

ずっと入ってずっと出ていくのだ。学習したという自覚が希薄、いやほとんどない。やらされている感など、まるでない。

そもそも表情や身振りは、話し言葉や書き言葉よりも、見よう見まねで覚えた感がはるかに強い。みんなが我流で真似て我流で実行している。辞書もない。

生理現象に近い。出すというよりも出る。気がついたら出ている。漏れる感じ。あれよあれよ、と。

こんなのをみんなしてやっているのだから、世界的な規模でのシンクロが起きるのにちがいない。ただし、意味やメッセージは不在か保留されたまま。

*

世界中でしかめっ面がシンクロしているさまを想像しているうちに、思わず苦笑いしている自分がある。にやにやとした意味のない笑い。何となく漏れてしまう笑い。

そうだ、笑いも世界中でシンクロしているはずだ。そう考えると、にやにやがにこにこに変わって気分が上向く。

強面の私が笑うと、すごんでいるとよく勘違いされる。こっちには、そんな気持ちはさらさらないので。シンクロ競技の勘違い平行棒。二線は決して交わらない。

私の笑顔はしかめっ面にも見えるらしい。

ここはどこ？

＊

ここはどこなのだろうとよく考えます。自分は誰なのかとか、自分とは何なのかという気持ちとは違います。自分という存在を保留あるいは度外視したうえで、ここはどこなのかと考えるのです。

施設や病院に収容された人が一番よく口にするのは、「私は誰？」ではなく、「ここはどこ？」と「(あなたは)どなた？」だと言われます。「自分は何ぞや？」という問いはよほど心に余裕がないと頭に浮かばないのではないか。だいいち、そんなことを考えるのにはパワーが要るだろうと想像しています。

施設で面会した母が口にした「ここ、どこなの？」が忘れられません。似た状況に置かれれば、私もそう言うはずです。「ここはどこ？」という問いに、捨ておかれた人間のよるべなさや切羽詰まった人間の叫びを感じます。

人にとって根源的な疑問ではないかと言いたいくらいです。人は生まれて「ここはどこ？」とおぼろげながら感じ、「ここはどこなのだろう？」とときおり考えながら生き、「ここはどこ？」とおぼろに思いながら亡くなる、という気がします。

＊

いまこうして文章を書いている場所は自宅の居間なのですが、ここはどこなのでしょう。頭では分かっている気がするものの、よく考えると不明になります。PCに向かって文章を入力している時には、いったいどこにいるのでしょうか。

サイトにログインしてキーボードを叩いて画面に直接記事を書いている最中には、ネット空間にいるのかもしれませんが。では、大学ノートにペンを走らせ文字をつづっているさいには、どこにいるでしょう。

文章を書いているさなかの自分の居場所は不明です。行方不明なのですが、それを意識すると、とたんに文字が書けなくなります。逃げていくのです。

だから、居場所など考えないようにして、言葉を書くためには心を「どこか」にあずけます。その「どこか」は「かなた」ではないかと思うことがあります。「ここ」でないことは確かです。

＊

小説を読みながら、あれこれ情景を思い描いているあなたは、どこにいらっしゃるのでしょうか？
映画に見入っているあなた、音楽を聞いているあなた、トイレでぼーっとしているあなた、そして、この記事を読んでいるあなたはどこにいらっしゃるのでしょうか？

病院の待合室なんかでスマホでゲームをしている人を見ると、あの人はどこにいらっしゃるのかと考えこんでしまいます。あと車や電車で移動している人も——自分を含めてですが——どこにいらっしゃるのか分かりません。

どうやら意識について考えているようですね。身体と意識を分けて考えているということでしょうか。意識と体はつながっているはずなのに、それぞれが別のものだと、意識しているらしいのです。

たぶん意識しているのは「意識」でしょう。身体が恋しいのかもしれませんが。きっと離れられないのです。別のものだと意識すること自体が一体感をいただいている証拠です。

＊

夜に寝入る時の感覚が好きです。意識だけになってずっと夢うつつの境地に入っていくとき、このうえない安らぎを覚えます。寝際には論理的な思考が希薄になりますが、道理や筋道にかなった思考ではすくい取れない物や事と触れ合う時空の中にいる気がします。

お酒や薬物の助けを借りなくても誰もが毎晩経験するであろう、そうした「夜の思い」を大切にしたい。ぼーっとしているときだからといって、ないがしろにしたくはない。

むしろ「夜の思い」について積極的に考えてみたい。言葉にできこない物や事や思いに、あえて言葉を与えてみたい。いつともどことも知れない、いまここで、そんな気持ちでいます。

夢のような映画、映画のような夢

＊

俯瞰とは場所つまり空間だけの話ではありません。時間的な俯瞰もあります。スケジュール表、タイムライン、カレンダー、年表などは、時間を見える化するだけでなく、時間の流れを時系列で視覚化する仕掛けとか仕組みとか装置だといえるでしょう。

地誌・地史、家系図、伝記、国の歴史、世界史、文学史、音楽史、科学史、宗教の歴史というぐあいに、個々の事象にまつわる出来事を時系列で記述しようとする人の試みと情熱には驚かされます。

図書館、博物館、美術館、博覧会も、それぞれが俯瞰の一形態だと見なすことができるでしょう。百科事典、辞書、図鑑、博物誌のたぐいも、空間（地球・宇宙）だけでなく時間（歴史・有史以前）の俯瞰を指向していますね。人の飽くなき意志と欲求に驚かされます。

＊

俯瞰という身振りは、人が初めて水面に「かがみ」こんで自分の姿を見た身振り、そして鏡を作り毎日鏡に見入っているという身振りに重なります。自分を見ているつもり。でもその鏡像という似姿は自分ではないのです。

見えているのは自分ではなく自分の影、幻影なのです。さらに言うなら、そもそも人は自分を肉眼で見ることはできません。つまり、鏡のなかの似姿が自分と似ているのを自分で確かめる術はない。

ここに「見る・見える・見ない・見えない」の原点がある気がします。

個人的な話ですが、自分が自分では見えないことに気づいたり、思いだしたり、意識するのは、鏡を覗きこんだ時以外に、自分が見た夢を思いだす時と、テレビドラマや映画を見ている時です。話を簡単にするために、映画を例に取ります。

*

映画では主人公を含む登場人物がうつりますが、ある登場人物の視点から見られた場面は以外と少なく、その光景や状況やストーリーを分かりやすくするための位置にカメラが置かれて撮影されている気がします。よく考えると誰の視点から、そのシーンが撮られているのか不明になるのです。

居間でお茶を飲んでいる二人を撮った場面を想像してみてください。カメラは、その二人の視点以外の位置で撮られている場合が多いのではないのでしょうか。高い位置から見下ろしてはいませんが、これは一種の「俯瞰」だと思います。

つまり、その状況を説明するのにふさわしい位置から、「展望」しているというか、全体の様子が分かるような絵になっているのです。現実では、まずありえない絵だとは思いませんか？ 誰が見ているのでしょうか？ どの位置から描いているのでしょうか？

*

ひょっとして、映画の視点は夢を真似たのではないのでしょうか。夢の中では、しばしば自分の姿が出てきます。現実の自分にそっくりな自分もいれば、別人を演じている自分もいたりします。自分が動物とか物になっていたのではないかなんて、目覚めてから考えこむ不思議な夢もあります。あくまでも個人的な印象なのですけど。

映画が発明され、映画の二代目みたいなテレビが発明され、いまではネット上で動画が閲覧できる時代に住んでいる私たちは、映画やテレビや動画（ゲームも含みます）に似た夢を見ていることは十分に考えられます。昨夜、ゲームをやっている、あるいは自分がゲームの中にいる夢を見た人はいませんか？

人は夢を真似て映画の撮影術を発達させ、より精緻で洗練されたものにしてきた。それと並行する形で、映画を真似て夢を見るようにもなってきた。そんな気がします。人は意識的あるいは無意識に自分に似たものをつくり、そのうちに自分のつくったものに似てくるのではないかとよく思うのですが、映画もそうかもしれません。

夢を真似て映画をつくる。映画を真似て夢を見るようになる。こう書くと、何だかありそうに思えてきます。現実を真似てお芝居をつくる。お芝居を真似て、日常生活で演技をするようになる。現実を真似て歌う。歌を真似た声や叫びを日常的にするようになる。

恥ずかしい話ですが、私はテレビドラマのさまざまな演技を実生活で真似ることがあります。人と話したり、人に接する時に多い気がします。

＊

映画以前に歌があり、お芝居があり、映画と並んでラジオが出てきて、テレビが普及し、テレビゲームが発明され、いまではPCゲーム、インターネット、YouTube、VRが共存する時代になっている。自分の知覚に合わせて何かをつくり、そのつくったものに知覚を合わせていく。

まるで鏡の前の人ですね。鏡を見ながら自分の振りをつくっていく人の身振りを想像しないではいられません。それが夢を見ている自分に重なり、軽い目まいを覚えてきました。

ひょっとすると、私たちは夢を真似て夢を見ているのかもしれませんが。

さらに言うなら、いまうつつで見ている光景もまた、夢、写真、絵画、映画やテレビやネット上の動画を真似て見ているのかもしれませんが。かつて見た物や事の記憶が、うつつを見るさいに重なってくるとか、見方に影響をおよぼしている。

夢のよううつつ、うつつのような夢。寝ても覚めても夢うつつ。目を閉じても開けても鏡の中。

そう考えると、ますます鏡の前にいる自分のようです。軽い目まいを覚えてきました。しばらく横になったほうがよさそうです。

知らない人

＊

気持ちと顔や表情が一致しないとしたら、さぞかし生きにくいだろうと思います。たとえば、いつもにこにこしているように見える人がいます。テレビによく出る人にも身近にもいます。

大変だろうなあと勝手に心配しています。四六時中にこにこしている人なんて考えられないからです。

体調や機嫌が悪いときにも、目だけでなく眉と目尻までが下がり、しかも目が細く見えると想像すると、つらいだろうなあと思います。生きていれば笑ってはいけない場面がたくさんありますから、そんなときには苦労なさっているのではないかと同情しないではられません。

得になることもあるにちがいません。ほほ笑んでいるとか笑っている顔や表情は、まわりをなごやかにします。人のためになるのですから、得ではなく徳になるというべきでしょう。人徳です。

個人的な話になりますが、どちらかというが強面なのが悩みです。むすっとしているつもりではなくても、そう見られるなんてざらです。でも、目を細めてほほ笑むと赤ちゃんが敏感に反応して笑みを返してくれることがあり、そんなときにはうれしくて涙ぐむことさえあります。

＊

気持ちと顔や表情が一致することなど、まれではないでしょうか。表情とか顔つきは印象に左右されます。悲しいことに他人の印象です。他人が決めるのです。だから、自分の自分と他人の「自分」とのあいだに、ずれが起こります。

自分が悲しいのに自分が笑って見えるのだとすれば、その「自分」は自分にはどうにもならないと言えます。このままならさが自分に対する異和感になるのではないのでしょうか。

ところで、ふだんは違和感と書くのですが、この文章では異和感とします。たとえば、村上春樹（『1973年のピンボール』（講談社文庫）の p.12）や古井由吉（『杏子』（新潮文庫）の p.134）の文章で見かけたことがある表記です。

今回、あえて異和感とするのは、自分が異物であるという感情について書いているからです。言葉と文章にも顔と表情があります。あえてふだんとは違う表情をすると、どんなふうを受けとられるかと気になります。

＊

自分を器とか乗り物にたとえる例は多いですね。自分が自分の身体という殻の中にあるとか、自分が自分という乗り物に運ばれているように感じられる、そんなイメージです。小説や映画や絵画でもよく出てきます。この場合には明らかに自分に分裂が生じていますが、分かる気がします。

長身である自分に異和感を覚える。こんな顔じゃ嫌だ。この性格を変えたい、直したい。あの人に成りかわりたい。自分の声が嫌で仕方ない。あなたの指とわたしの指を取り替えてくれない？ 誰でもいいから自分以外の人間に生まれ変わりたい。ぼくは「外人、外人」と言われて育った。ある仕草や表情を無意識にしている自分を動画で知り、それ以来気になってならない。美容整形を、大小含めて、十回している。もはや来世しか楽しみがない。蒸発や失踪して別の人格として生きたい願望が強くある。

＊

他人の決める「自分」が自分への異和感となるのではなく、自分の中で見知らぬ自分がその領域をしだいに広げていく場合があります。これは、異和感というよりも異物感というべきかもしれません。異物とは自分です。

知らない人にやたら挨拶される。ここはどこ？

＊

知らない人にやたら挨拶される。

心当たりはありませんか？ ご自分でなくても、身のまわりにそうした思いをかかえている人がいませんか？ これは深刻な問題であり、誰もがそうした心境になるリスクをかかえています。ここまで来ると自分に対する異和感ではなく、世界に対する異和感なのかもしれません。世界がじわりと異物になる。ふとした瞬間に世界が異物に感じられる。

ここはどこ？

この場合の世界は、自分という殻がすでに壊れて、自分が世界そのものになっていて、「ここはどこ？」はその「世界」からの静かな悲鳴なのかもしれません。自分にとってもっとも身近な人が、この言葉を発したのを目にし耳にした経験があります。悲しかったです。これもまた決して人ごとではありません。ここまでくると、人は言葉が失われていく過程を生きているのかもしれません。こちらからの言葉がもう通じなくなっていくので想像するしかないです。

*

気持ちと顔や表情が一致しないとしたら、さぞかし生きにくいだろうと思います。たとえば、いつも不機嫌であったり怒って見える人がいます。テレビによく出る人にも、ごく身近にもいます。

そのごく身近な人ですが、さいわいなことに知らない人にやたら挨拶されると感じている気配はありません。ただ知っている人から挨拶されないとは昔からぼやいています。「知らない人からやたら挨拶されるよりはいいでしょ？」といつも慰めています。

もう、そうなのかもしれない

＊

”一週間目の夜に電話をかけると、杏子に似た声が受話器の中から細く響き出てきた。杏子の声とはすこし違うなと聞き分けて、「Sという者ですが。ヨウコさんをご在宅でしょうか」と初めて口にする《ヨウコさん》という言葉にぞっとするような異和感を覚えながら言うと、「少々お待ちください」という無表情な声とともに受話器がコトリと台の上に置かれて、足音がたしかに階段を登っていった。”

古井由吉『杏子』（『杏子・妻隠』所収）新潮文庫 pp.133-134）

私にとって《いわかん》は二つある。違和感と異和感なのだが、前者が一般的だろう。違和感とはちぐはぐな、ずれた感じで、異和感はぎょっとする異物の現れを前にした動揺であり、どちらも捨てがたく両方ともあってほしいと思っている。

私の場合には、それぞれがさらに二つに分かれる。単純に言うと、自分が変わるか、それとも世界が変わるかである。そんなわけで、計四つの「いわかん」があることになる。

周りが変われば自分には責任がない。変わって立ちあらわれた世界に責任を転嫁すればいい。一方で、よりによって自分だけが変わってしまったとして、身に覚えはなくても責任を感じるのが人情ではないだろうか。

ある朝目覚めてみたら、自分を除いて巨大なゴキブリたちの支配する世界になっていた。または自分だけが巨大なゴキブリになっていた。

自分はいつもどおりの見慣れた自分であって、世界全体が見慣れないものによって変わっている。あるいは、自分だけが見慣れない「何か」によって変わっていて、世界はいつもどおりの様相を呈している。いずれにせよ、自分から見れば、自分だけが違うし異なるのだから、困った事態であることに変わりはない。

＊

巨大なゴキブリだと大げさすぎてリアリティに欠けて恐怖感がない。それよりもっと怖いのは、どこかが違う、何か異なるではないだろうか。なにしろ、どこかがどこなのか、何かは何なのか、よく分からないのである。

確認しようにも、怖くて深追いしたくない。深追いして違和や異和の正体を白日の下にさらしたくないという心理が働くのである。すると疑心暗鬼を生じて異和や違和が増大し、「こんなふうになっているのは自分だけではないか」という孤立感がさらに深まる。

どこか知らないが異なっている、なんとなく違っている。まるで暖簾に腕押し。根拠の希薄な違和感や異和感ほど不気味なものはないだろう。しかも、異物と化したり、ずれてしまったのが、自分なのか世界のほうなのかが不明ときている。ダブルパンチ、ダブルピンチ、場合によってはダブルバインドである。

それだけではない。異和と違和の根拠が薄弱なだけに、どちらに問題があるのかが逆転しそうな気配さえ漂わせている。まるでネガとポジ。どっちにひっくり返るか分からない。優柔不断で頼りないものほど、面倒で頑固なのである。

ネガとポジ、白と黒の反転。一回の反転を想像しただけでも目がまわりそうになるが、根拠の乏しさがその反転をさらなる逆転へと誘う。ネガポジネガポジネガ。白黒白黒白。

図柄はまったく同じままに反転しそれがさらに逆転する世界。反転と逆転がひっきりなしに繰り返される世界。自分と世界のどちらに問題なり責任があるのかは依然として不明。

＊

白黒、ネガポジ、陰陽、明暗というふうに見て分かる反転なら、まだましなのかもしれない。

善悪、正誤、真偽、虚実だと、どうだろう。善だと思っていたものがとつぜん悪に、正しかったものが誤りに、真実が偽りに、虚構であるはずのものが現実になる。

こうした反転は、見ただけは分からない。何らかの出来事が切っ掛けで、じわりと実感されるというか、身に降りかかってくるにちがいない。

反転が生じたのは分かったとしても、自分に責任があってそうなったのか、世界のほうに問題があって異変が生じたのか、皆目見当がつかない。違和と異和、反転と逆転が交互にやって来る。自分の中の問題なのか、世界の側の問題なのか。

夢と同じで見ているしかない。もう夢なのか。まだ夢なのか。うつつと夢が反転しつづける夢、またはうつつ。

善だと思っていたものがとつぜん悪に、正しかったものが誤りに、真実が偽りに、虚構であるはずのものが現実を感じられ、しかもそれがあある出来事を切っ掛けにとうとつに反転し、さらにある時になっていきなり逆転する。

まるでいまの時代や世界とそっくりではないか。こんなものに付き合っていたら、そのうち心が壊れるに決まっている。もう、そうなのかもしれない。

VRで自分に会いにいったその帰りに

＊

写真機では長いあいだ自分を撮ることはできませんでした。簡単に撮れなかったというべきかもしれません。それがいまではできます。スマホのカメラで可能ですが、簡単というわけではないでしょう。誰もがけっこう苦労して撮っています。

いろいろテクニカルな問題があって苦労なさるのでしょうが、「こんなはずじゃない」とか「私はこんなふうじゃない」という不満が根っこにあって、スマホに付いているレンズを恨みつつ、撮る位置や光の具合を調節しているのではないのでしょうか。

人は自分を自撮りで撮影し、その像をリアルタイムで見ることができるようになりましたが、それでも満足できていないもようです。がっかりしているからです。ちょっと違うんじゃない？　こんなもの？　これだけ？　という感じです。

鏡や写真や動画で自分を見る行為は、失望感と隣り合わせなのです。ぜんぜん納得できていない。だから、毎日毎日、お化粧品やエステや身だしなみに骨身を削るのです。

その裏というか根本には、自分に会ったことがない、つまり肉眼で自分を見たことがない、さらに言うなら誰もが自分には絶対に会えないという現実があります。

現実はおどかしくままならないのです。世界でいちばん気になる人を見たこともなければ、一生会えないのですから。

＊

人が満足する形での究極の「自分を見る」とは、「別人として自分を見る」ではないのでしょうか。自分が別人にならないかぎり、それが不可能だと分かっているので、失望感と不満は永遠に続くと思われれます。「もっともっと」「もっと見たい」が延々と続くという意味です。

本当の自分の姿は、街ですれ違った見知らぬ人の目に映った自分だ。そんな意味のフレーズを古井由吉の文章で読んだ記憶があります。別人の目で見える自分ということでしょうね。いま考えると分かる気がします。

「光学的に見える」だけでは「本当の見る」ではないとも言えるかもしれませんが、この「本当の見る」はおそらく幻想でしょう。知覚に限界のある人間にはありえないという意味で強迫観念であり、抽象にちがいません。

人の裸眼と肉眼は、無媒介的に世界を見る能力ではありません。しかも、どんな器具や器械や機械をつかって見たとしても、最終的には人はその映像を裸眼で印象として見るしかないのです。

ゆがめて、まばらでまだらに、しかもぼやけて見ているとも言えるでしょう。「見る」「見える」は人の想定しているほどの「見る」「見える」ではなく、あくまでも努力目標でしかありません。

＊

それだけではありません。人は「何か」に「何か」を見てしまうのですが、それどころか、自分が見たいものや自分が知っていると思っていることを見てしまうのです。

簡単に言えば、人は「見えている」はずのものをしばしば「見ておらず」、むしろ「見えないもの」を「想像して見ている」（いわば鏡の中に見ている）のであり、「見えているはずのもの」よりも、その「想像して見ているもの」のほうにより興味と愛着を持っていて、その結果として、人には「ないもの」を「ある」と錯覚し、さらにはその錯覚を強化して「ある」と決めるという仕組みが備わっているということになります。

人は「見たいもの」（それが「見えない」にもかかわらず）を「見える」と決めるために、その根拠となりそうなものを求めるのです。

こうも言えるでしょう。人はないものをあると決めるために、その根拠となりそうな

ものを求める。捏造する。その根拠は何であってもかまわない。いわば、イワシの頭も信心からの「イワシ」は何でもあってもいいのです。

求める、でっちあげる——それが人の「見る」であり「見える」です。

＊

スマホで自撮りが可能になった気がしたとき、「自分が見えない」という不可能性の沼のなかにいる人間は歓喜したと思われれます。「ついにやった！」と。

水面や鏡に出会って自分の姿が見えないという事実に気づいた人間は、写真に出会って一時的に歓喜したものの、すぐに失望し、つぎに映画や個人フィルムにもがっかりし、現像の要らないポラロイドにも意気消沈し、デジタルカメラと三脚をつかっただけの撮影にも落胆し、スマホカメラの登場でリベンジを果たそうとして張りきったのはよかったです。やがてその空しさにしょげこむ事態となりました。

ついにリベンジしたかの喜びは一時的かつ一過性のもので終わりました。「やっぱり見えなかった」「こんなはずじゃない」「こんなものか?」「話が違う」

欲求や欲望は目的を失っても空回りするそうです。

というか、まわること自体が目的化するらしいのです（経済活動や金融や資本主義がいい例です）。本来はまわらなければならない根拠がないだけに（根拠は捏造したものだからです）、しつこいということでしょうか。分かる気がします。人ごとではありません。

＊

きわめて近い将来に仮想現実で自分を見たり、自分に会ったり、自分と対面するゲームが流行りそうな強い予感があります。メタバースやアバターより進化した話です。自分を見たいというのが、大金を投じて宇宙空間に漂うよりも、身近で現実的な願望だという気がするからです。この欲求は自撮りの延長線上にあります。

どうやら自分を見るためには他人になる必要がある。めったに話題にはしないものの、人はそのことに薄々気づいています。

自分を見ることができないという恒常的な不満を無意識にかかえている人間が仮想現実
に救いを求めるのは、ごく自然ななりゆきであり、必然であると考えます。AIを
駆使して個人情報である多量の映像や文書を処理し、CGを利用してその人をもう一人
つくりあげる。

そのもう一人の自分に、もとの自分が会いに行く。見る。対面する。声をかける。対話
する。触る。触られる。「相手」の汗の味を舌で感じたり、腋臭を嗅ぐことさえできるか
もしれません。「相手」と「交わる」人が出てきてもおかしくはありません。というか、
それが人の究極の欲求かもしれません。

満足のいくだけの臨場感をもって自分に会うことができるのでしょうか。疑問に思われ
ますが、これはやってみないと分からないでしょう。

*

VRで自分に会いにいった気づくこともあるでしょう。考えられるのは、そこで会っ
た自分が依然として見えないということかもしれません。正確にいうと、臨場感が足り
ない気がするのです。つまり、がっかりするのです。

VRで自分に会いにいった帰ってきてから気づくこともあるでしょう。考えられるの
は、現実として目に映っている世界、聞こえてくる世界、匂いとしての世界、触れ触れ
られる世界こそが自分なのではないか、という思いかもしれません。

世界こそが自分である。この気づきと死後の世界や天国やあの世を見たいという願望
は紙一重だという気がします。いまや人は来るところまで来ているからです。とはいえ、
それが終りだとはどうも思えません。

あやしい動きをするもの

＊

UFOは空を飛ぶわけの分からないものを指しますが、昔は「空飛ぶ円盤」とも呼ばれていました。でも、円盤状だけでなくいろいろな形状のものがあったみたいで——葉巻型なんてあった気もします——いまではUFO（未確認飛行物体）という言い方が定着しているようです。

みなさんは、どんな形の物が空を飛んでいけば不気味に感じますか？ いかにも定番っぽい円盤状、火の玉みたいな球状、あるいは葉巻とかウィンナーみたいな形、立方体、直方体、昇り龍や蛸やネズミみたいに生き物っぽい形——いろいろ考えられますね。

私は丸かったり球状のものには洗練を感じます。形として見事で美しいのです。あと、丸いものは広がるというか拡散する気がしてなりません。無限に大きくなっていくのではないかという怖さも感じます。固体や液体よりも気体をイメージしているのかもしれない。

輪っかとか丸いイメージは人を安心させます。ぐるぐるまわる——アナログの時計の針が円をえんえんとなぞりつづけているさまが好きです。ぴょっこり、あらまた、ぴょっこり——デジタルの時計の数字がなんどもなんども反復してあらわれるのもいいですね。時計は絶え間ない既視感の製造装置。えんえんとつづく既視感をともなう記憶。循環する日、週、月、年。

（私は時計やカレンダーは循環する思い出の製造装置ではないかと思っています。時計を生き物にたとえるなら、人は地球上の無数の時計と共生しているかのようです。でも、もし人が時計に依存する度合いが高ければ、ひょっとすると人は時計に寄生しているのかもしれないね。これはすべての器械や機械や器具に言える気がします。）

いずれにせよ、時間と空間を直線ではなく、めぐりめぐる円環だとイメージすることで、人はずいぶん救われるし励まされもするのではないのでしょうか。

一方で、長方形や立方体だと職人的な完成度を感じて、こんなのが空を飛んでいたら手強い気がします。人工的というか作為を感じるのです。長方形や楕円形だと知的な生物がつくって操縦しているのではないかと考えてしまい、やはり恐ろしいです。とはいえ、なにぶんにも、UFOらしきものを見たことがないので、空想はしますが現実味を覚えません。

＊

個人的には、形よりも動きに注目したいです。動きのほうがリアルに怖さをイメージできそうな気がします。そもそも、動きのない顔よりも動く表情、姿や格好よりも仕草や身振り、形体よりも動作のほうが生々しいし不気味じゃないですか？ 動きは予想がつかなくて不安になります。

つまり、固定よりも変化を恐れるのです。なにしろ、変化（へんか）は「へんげ」とも読みます。ゲゲゲの鬼太郎みたいで、「げ」という濁音が不気味ではないですか？ 七変化（しちへんげ）の変化ですし、語呂から変幻自在（へんげんじざい）を連想するのかもしれない。こういうことって大切です。

「みなさんは、どんな形の物が空を飛んでいけば不気味に感じますか？」に話をもどします。

直線で落下するように動けば、隕石の可能性があり得体が知れて安心するかもしれません（落ちるのが自分のいるところでなければ、ですけど）。つまり素直なのです。直線で水平に動けば何かが乗っている可能性を感じて恐ろしいです。でも飛行機かもしれないと考えると安心しますね。ミサイルの可能性もありますが、もしミサイルならまわりが大騒ぎしているはずだと考えそうです。

ふわふわ——こんなのが飛んでいけば妖しいです。見たことはありませんが、火の玉を連想します。ただ人魂だと思えば、気心の知れた同士ですから、手を合わせてひたすらお祈りをする事で消えてくれそうな楽観と安心感があります。

いちばん怪しく妖しいのはジグザグです。これは不気味だし、マジで怖い。知性

や人間もどきっぽさや、感情を感じるからだと思います。感情は動きのなかでも、とくに予測がつかなくて不安です。しかも人魂と異なり、話の通じなさそうな生き物とか生命体めいていて怪しくて恐ろしいのです。中に乗っている「物」の姿までが勝手に頭に浮かんで来て、鳥肌が立ちそうです。

ZIGZAG、zigzag、ジグザグ、じぐざぐ。字面と語呂があやしいですね。音と形が蛇の形と動きを連想させるのかもしれませんが。蛇を敵として知覚する生き物は多そうですね。もちろんヒトも。かたちそのものがうごきを思わせます。

＊

動くというのは、あくまでも人間としての枠内で判断しているものかもしれません。知覚に左右されるという意味です。

植物を考えてみてください。特殊なカメラと特殊な撮影法で——この「特殊な」ってテキトーな言葉で便利ですね、知らない複雑そうなものだったり、得体の知れないものはぜんぶ「特殊な」と形容すればいいのです、ニュースでよく出てきます——、数秒とか数分のあいだに、何か月、あるいは何年にもわたる動きや変化を映す動画があります。

ああいうので見ると、植物ってめちゃくちゃ動いているじゃないですか。ひゅるひゅる、によきによき、動きます。場所は移動しなくても、その動きはすごいです。あと、地殻運動に見える化した映像がありますが、あれも感動的です。日本列島やそこにある山脈やまわりのプレートがどのように形成されたかをCGかなにかで見せているわけですが、めちゃくちゃ動いていますね。

＊

動きって不思議です。というか、人には見えなかったり知覚できない動きがいっぱいあって、私たちはそれに気づいていないだけなのでしょうね。なんだがぞくぞくしてきました。あたりを見まわしています。よく考えると、身のまわりのすべてのものが移動してここにあるわけです。それに、いつまでもここにあるわけではありません。

「ここ」にある「これ」は、以前は「こう」ではなかったし、「どこか」にあったはずで
す。万物流転。万物動転。気も動転。びっくり仰天。

はあ。ため息が漏れました。すべての物が長い目で見れば動いているのですね。目の前のペンや本やリップクリームが健気で愛おしく感じられます。みんな頑張っているんだね。

あ、自分もそうだと気づき、いまビビっています。というか、この部屋でいちばん動いているのは、この私じゃないですか。千鳥足で右往左往。たぶんジグザグを描いています。

移動しながら静止している

＊

車の話です。

運転者や同乗者は動いていながら動いてはいない。というより、自分が動いているとつねに意識しているならば、きっと差障りがあるのでしょう。

車は動いているけど、自分は左右にも上下にも動いていない、つまり快適だ。さもないと酔うに決まっています。事故を起こすにちがいません。

車も人もうまくできているなあと感じずにはられません。列車も船も飛行機も、そしておそらく宇宙船や宇宙ステーションも。

自転車もそうです。忘れていました。あれは全身で乗っています。もう乗れない体になりました。

あと、体や意識もそうです。人は体や意識という器とか乗り物に収まっているのではないかという話です。どう思うかは人それぞれです。

＊

車では、運転者がカーナビの画面を見ることがあるし、音楽を聞いていれば、意識の一部は遠くどこかに飛んでいる。同乗者と会話したり、考えごとをしていても意識は部分的に飛ぶに決まっています。それでも運転はできるのですから、車がそういうふうにつくられているのでしょう。

乗り物では同乗者や乗客がパソコンやタブレットやスマホをいじっている場合もあります。自分の体が移動しながら、頭の中でめまぐるしく移動したり動いたり歌ったり読んだり書いたりしているわけです。

場所とか移動とか自分とか他人、そうした言葉でしか知らない事物や現象が不明に感じられてきます。そうしたものの同士の境も分からなくなってきました。たぶん分かったり考える必要はないのでしょうか。考えることが、ときには生きる妨げになるという例でしょうか。

＊

自分が動かずに動きを見るという点では、車やインターネットは、スクリーンを見るテレビや映画に似ていますが、自由度が異なります。テレビにはチャンネルが換えられ、見ないでもいられるという自由度があります。

一方の映画には、極端に言うと、椅子にくくりつけられてスクリーンを強制的に見る不自由さがあります。

この不自由さの極致が夢です。夢はどうにもなりません。椅子に縛られて強制的に見せられるのが夢です。しかも観客はひとりだけなのです。

どんなに愛している人とも、いっしょに夢を見ることはできません。眠った瞬間に、人はひとりになります。たとえ、ふたりで寝ていても。

文字どおりの同床異夢ですが、これとは逆の異床同夢を夢見てつくられたのが、映画やテレビやネットなのかもしれません。好きな人と同じ夢を見たい、同じ夢の中にいたいものです。

人でいるとは、それぞれが別人として生きることです。ふつう他人とは言わない親子でも別人です。

愛する人や仲間と同じ夢を見たい、同じ夢の中にいたい。死後も……なんて夢見るのは、たぶん欲深いのでしょうか。こればかりは死んでみないと分かりません。

とはいえ、たったひとりで見るのが夢と夢うつつであり、集団で見る夢と夢うつつが現実(うつつ)なのであれば、集団で見る夢としてあの世があってもいいというのは、魅力的な考えですね。

私はひとりでいるのが好きなので、個人的には、あの世でもひとりで見える夢が見たいです。ああ、なんて貪欲なのでしょう。まるで、あの世に行くのが当然みたいな口ぶりですね。そんなの分からないのに。

*

現在は、場所や移動や静止という言葉でイメージしていることが不明になっている時代だと思います。

移動するといえば歩くか走るしかなかった時代には、場所も「ここ」と「あそこ」と「ずっとむこう」くらいのもではなかったでしょうか。馬に乗るや、牛に乗るや、馬車や牛車や舟が出てきて、人の場所についての言葉やイメージが変わったと想像します。

自分が器か乗り物に収まっているのではないかという思いはもっと古くからあったかもしれません。夢、思い、想像、空想では、「ここ」が不明になります。「あそこ」や「むこう」に居たり行ったり帰ったりするという思い、つまりイメージは太古からあった気がします。

*

思いの中の「ここ」と、現実の「ここ」ではぜんぜん違うという考えもあるでしょう。

まわりを見まわしてください。どこにいるかを確認したら、目をつむってみてください。目をつむって、さっき見て確認した「ここ」を思い描いてみてください。

目を開けて見える「ここ」と、目をつむって体感する「ここ」は違っていませんか？

*

自分の居る場所を正確に言葉と数字で言ってみてください。

国名、県名、市町村名、番地、建物なら何階の何号室。乗り物に乗っている場合には、どこを移動しているのかできるだけ詳しく言葉にしてみてください。

そこが、たぶん抽象的な「ここ」です。抽象ですから体感できません。体験できない「ここ」だと言えます。

＊

いま挙げた全部が「ここ」なのだと思います。

そう考えると、「ここ」って不明ではありませんか？ こことは、こころにあるところだという気がします。

そうじゃない方もいらっしゃるにちがいません。人それぞれです。「ここ」もいろいろ、「こころ」もいろいろ、人生いろいろ。「ところ」変われば、品変わる。

＊

自分が地球に居ることは確かでしょう。あるいは銀河系とか、宇宙でもいいです。この世でもいいです。それも「ここ」でしょう。

「ここ」には「あそこ」や「あっち」や「あなた」や「むこう」も含まれているのかもしれない。たぶん、そうなのでしょう。

202〇年〇月〇日〇時〇分というふうに、時間というか時刻も、「ここ」とは切り離さない気がします。切り離せば、それは抽象になるという意味です。

個人的には、「ここ」と「いま」あつての「ここ」と「いま」だとイメージしています。

かつての「ここ」、あの時の「ここ」、これから来るだろう「ここ」。

地球は動いているとか、宇宙は膨張しているというのは、知識であり情報です。抽象という意味です。いくら数字や数式や公式を挙げても、抽象を体感するのは難しいと思います。

体感できない気づきとか学びの多くは抽象です。知識とか情報の多くも抽象ですから体感できません。ここでは、おもに体感の話をしています。

体感が偉いと言っているのではなく、また正しいか正しくないという問題でもなく、体感の性質の話をしていると思ってください。

たとえば、天動説は体感できます。地動説は体感できません。人はこども時代に天動説を信奉し、やがて地動説に改宗するが、その後も密かに天動説の信者でありつづけるとも言えそうです。

大切なことなので繰り返しますが、正しい正しくないの話をしているではありません（そんなややこしい話は、ここでは無理です）。念のため。

ま、これも人それぞれです。上で述べた抽象を体感できるとおっしゃっている人の頭の中を、「どれどれ」と覗くわけにはいきません。

*

「同じ」とか「同一」という言葉とイメージをつかって考えてみましょう。

テレビのCMでマヨネーズが出てきたとします。その商品は、自分の家にある商品と同じです。「これこれ、これよ。三週間前に、スーパーでケチャップといっしょに買ったのよ」という感じ。

別のCMで、渋谷のスクランブル交差点が出てきたとします。そこには三十年前に、あるいは三年前に、または三日前に行ったことがあるかもしれません。「あそこ、あの信号の真下にいたことがある」という感じ。

で、その同じマヨネーズですが、同一ですか？ 同一とは原則として世界に、宇宙にたったひとつしかありません。

で、その信号の真下ですが、いま自分がそこにはいない、CMで撮影された日の「そこ」は、自分の居た「そこ」と同じなのではないでしょうか？ いま居る「ここ」に居ながら体感できない場所を「そこ」と称して、同一の場所だと言えるのでしょうか。

言うだけなら言えると思います。言葉をつかうと何とでも言えるからです。考えこむ人もいるでしょう。人それぞれです。

「いま」と「ここ」は切り離せない。同様に「あのとき」と「あそこ」は切り離せない。そう考えると、CMに映っている「あそこ」が、自分の居た「あそこ」とは同一だとは私には思えません。

CMの「あそこ」（正確には「あのとき」の「あそこ」です）には自分は居なかったという意味です。

*

パソコンやスマホやゲーム機などの端末の画面に見入っているとき、自分はどこにいるのでしょうか。音楽を聞いたり歌っているときの自分はどこにいるのでしょうか。

車を運転したり、乗り物に乗っているときの自分はどこにいるのでしょうか。運転中に誰かと話したり、考えごとをしたり、音楽を聞いたりしているときの自分はどこにいるのでしょうか。

乗り物で移動しながら、端末の画面に見入っていたり、誰かと会話したり、物思いにふけているときの自分はどこにいるのでしょうか。

たとえば、端末の画面に見入ったり、運転席からの車窓を見ているとき、端末を操作

したり、運転している人はたいてい静止しています。というか、静止していると思っています。

静止していると思ひこんでいるとか信じているのほうが正確かもしれません。

静止していながら、画面の中に見える、あるいは正面に見える、直線を進んだり、直線上で迷ったり、カーブしたり、回転したり、上下あるいは左右反対になったりしているのですから、画面を見たり、機械をいじっている人は不思議な時空にいるように思えてなりません。

*

たぶん、静止しながら、つまりある場所で足踏みしながら、円運動をしているのでしょう。円運動をえんえんと繰り返す。その円を切って伸ばせば、えんえんと伸びる直線や曲線になります。

スクロールや、スライドや、コントローラーの頭などでや左右縦横凹凸運動は、じつは巻物（ロール）をどンドンめくっているのです。巻物を伸ばせば、直線にも曲線にもなるでしょう。しかも上下運動ありです。

移動する、道を進む、ゲーム空間で動く、印刷された文書を読む、ネット上で文書を読む、動画を閲覧する、電子書籍を読む——こうした動き全部が円運動の反復と連動しているのではないのでしょうか。

それが静止したまま進む、つまり移動する仕組みだという気がします。空間の操作だけでなく、時間の操作でも同じだと思います。長針と短針が円を描くアナログ時計と、時間の進み具合の関係と似ています。

円運動はとどまりながら進む、あるいは進んだ気持ちになるという横着な方法であり名案なのです。

*

場所も時間も不明だという意味です。その不明という思いと、自分は動いていないという体感だけが、具体的な体験として「いま」「ここ」にある気がします。

さもないと、運転ができないし、端末を操作できないし、画面を利用できないし、そもそもおかしくなってしまう気がします。

これ以上おかしくならないために、この辺で失礼いたします。

動くとは止まっているとは、そうだと決めて、自分に言い聞かせることではないかというお話でした。

もっと簡単に言うと、動くとは静止することなり、というお話でした。

直線で切りとって分ける

＊

深夜の寝際のとりとめのない思いの記憶を早朝につづっています。

＊

外に出て、海、山、川、草、木に目をやると意外と長方形や四角がないのに気づきます。長方形が見えるなあと思うと、たいてい人がつくったものなのです。そして、そうしたのものには角があるのです。当たり前ですね。

真っ暗な山中の道路で人家を見ると四角い形をした光を目にしてほっとすることがあります。窓が四角いのです。その窓が人の目に見えて、その目を中心にして人の顔が浮かびあがってくるような気持ちになることもあります。そこには表情があります。

四角や長方形は人の印であり、そこに人がいる、いた、いるだろうという印なのです。一方、人体はどうかというと、あまり四角い部分が目につきません。長方形も感じません。角（かく・かど）も直線もないのです。曲線、いびつな形、丸みを帯びた角が目につきます。

人は自分に似たものや自分の中にあるものに似たものを無意識につくっているのではないか。つくっているうちに自分のつくったものに無意識に自分を似せ、それに似てくる。そう考えることがあるのですが、長方形や四角については、どうやらそうでもなさそうに思えてきました。

眠れない夜に考えるのにふさわしい、荒唐無稽な話だと思います。

＊

そういえば、空を見ても長方形は見当たりません。楕円形っぽい長方形にも見える視界の枠が感じられるだけ。お日さまも雲たちにも、お月さまも星たちにも、角というものがありません。直線もない。空に見える直線は電線と飛行機の跡の白い線くらいです。

そもそも四角や長方形や五角形や六角形は、自然界ではあまり目にしません。直線自体がまれなのです。そうしたものを自然から採取して見るとすれば、顕微鏡や電子顕微鏡という道具をもちいるしかない気がします。結晶には多面体が多いですね。つまり肉眼をふくめた五感では出会えない形ではないでしょうか。

要するに不自然なのです。人の五感で感知できる限りでの自然に反しているともいえそうです。反自然、不自然。ありえない、抽象、観念。そういうものには整然とした美しさがあるのでしょうか。端正なのです。

○角形という幾何学を思い出します。苦手な分野でした。いまも近づきたくありません。頭の中でイメージとして転がすのなら面白そうです。幾何学というと、ナイル川とか揚子江やインダス川をイメージするのは、河口での灌漑とかなんとかがらみの連想でしょう。

測量をしているさまが頭に浮かんできます。紐や縄をつかって直線をつくっている様子も浮かんできます。何を測っているのでしょうか。長さや面積でしょうね。なぜ測るのでしょうか。分けるためにちががありません。耕地です。

農作物をつくらないと食べていけません。そのまえに土地を分ける必要がある。わたしの土地、おまえの土地、というわけですね。きちんと分けないと喧嘩や争いが起きます。直線で分割することで、測りやすくなるなんて理屈を幾何で習った記憶があります。偽の記憶かもしれませんが。

*

切り分けたのでしょうか。切るためには直線が必要です。刃物は直線部分があります。ぴんと張った細い紐でも切れますね、糸鋸を思い出します。ぴんと張った糸でお豆腐か羊羹かなにかを押し切っている様子をテレビで見た記憶があります。

手術でもある部分に糸を巻いて両方から引っばって切断していたような気がします。柔らかくて小さくて脆い部分なのでしょう。高度の器用さと熟練を要するようです。メスはおもに皮膚や脂肪や肉を切るのでしょうか。

縄張りを思い出します。縄を張って直線をつくり、こっちはわたしのものとか「うち」、あっちはおまえのものとか「よそ」と決めるイメージです。張る、切る、分ける。張り切って分けていたのでしょうね。納得できました。これで眠れそうです。

分ける、切る。やっぱり、これは人の中にあるのでしょうか。欲求とか欲望のことです。それが直線や長方形や四角という形として、人から出てくる、というか人がつくる。直線や角があるものは、人がいるという印なのです。自然界にはあまりない。人は反自然であり不自然ですから。

だから、夜に暗い中に煌々と輝く長方形に切り取られたまぼゆいコンビニのウィンドウを見て、安心するのでしょうかね。ああ、あそこに行けば、人がいて、四角い容器に入った食べ物がいっぱい並んでいる、なんて。いいですね。ほっとします。これで眠れそうです。

指が知っている、体が覚えている

＊

ゲームやマージャンやパチンコをしている夢を見ると聞いたことがあります。夢の中で手や指が動くとも聞き驚きました。三つともやらない私は、そのときには、なんだか滑稽な話だと思いました。

先日、夢から覚めた瞬間に、夢で文章を書いていたさっきまでの自分の気配があり、それがキーボードを操作する仕草の余韻とともに思いだされたので、「へえー、おもしろい」なんて他人事のように感じました。

夢の記憶が体感となって残っている気がして感心したのですが、夢でキーを叩いている自分を想像すると、夢の中のパチンコ同様に滑稽でなりません。

何かに夢中になっている人って、端で見ていると微笑ましいし可愛くありませんか？
夢の中の自分は、ほぼ他人です。

＊

夢の中の出来事は絵として、つまり視覚的に思いだされると思いこんでいたのですが、指の動きや体感としても想起されるようです。

体感といえばふつうは五感ですから、視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚として夢を思いだすとか、夢の中でそうした知覚が働くことはありえる気がします。

よーし、匂いのする夢を今夜見てみよう。そんなわけにはいきそうもないし、夢のことはたいてい忘れてしまい、覚えてない夢のほうが多そうなので、検証は難しそうですけど。

そもそも夢を検証するなんて、やっていけないことにも思えてきます。

＊

夢の記憶ではなく、現実起きた出来事の記憶の検証なら、やっていいでしょうね。げんにやっている人は多いです。

とくに興味があるのは、触覚の記憶です。これが自分の中ではいちばん「体感の記憶」っぽいのです。

さわる・さわられる、ふれる・ふれられる、おす・おされる、なでる・なでられる、さする・さすられる（こする・こすられる）、あてる・あてられる、つねる・つねられる、ひっかく・ひっかかれる、たたく・たたかれる。

こう並べてみると、なんだかいやらしくも見えてきます。これは触覚ではないでしょ、と言われそうなものもありますが、お遊びなので大目に見てください。

大切なのは「〇〇する・〇〇される」というふうに、触覚には双方向性があることです。ほかの知覚にはありそうに思えません。触覚は相互的なものなのかもしれません。

そりゃあ、そうです。触ることは、何かに触れることでもあるわけですから。その何かは人であったり物であったり生き物であったりします。まさにふれあいですね。

世界と触れあうなんて、想像するとぞくっときます。このぞくっというのが触覚や触感への扉であり窓なのではないでしょうか。

＊

触感で思い出しましたが、食感とは、舌、歯、口蓋、唇といった場と外から入ってきたものの触れあい、かかわりあいです。ある意味、エロチックです。

食べることと性愛はつながっている気がします。

たとえば、性愛は触れあいの極致です。体感、五感を総動員しての、必死な行為です。テレビで生き物の生態を記録した番組を見ていると、植物であれ、動物であれ、性愛や生殖にむかってまっしぐらという感じがします。

生殖は、子孫を残すためですね。それを広義のプレイ（遊戯・遊技、演技・演劇、演奏、競技）にまで高めているヒトはすごいと思います。

あそび、たわむれ、えんじて、かなでて、あらそい、きそう。

このプレイというのはどれもが、体感、五感を総動員しての行為です。スポーツがいちばんイメージしやすいと思います。競技の相手とだけでなく、世界との全身的な触れあいです。

プレイでは、「する」と「される」の区別が意味を失います。分けていてはプレイできない気がします。つまり、分けが分からない状態で臨み、いとなむのでしょうか。

いやらしく響いたら、ごめんなさい。

*

手が覚えているとか、指が覚えているとか、体が覚えているという言い方があります。これも取りようによっては、いやらしく聞こえませんか？ それは脇に置いて話を進めます。

車や機械の運転や操作は手や体で覚えているものだと思います。同じ車種や機種でも、違ったものをつかうと違和感を覚えます。まして別の車種や機種を操縦するとなると、慣れていない人は戸惑うのではないのでしょうか。

違和感が分かりやすいのは、やっぱり思いや気持ちよりも体感だと思います。体感は触感の王様みたいなものですから、「〇〇する・〇〇される」という双方向性と相互性がダイナミックかつダイレクトに感じられます。

なぐる・なぐられる、ひっぱる・ひっぱられる、つきだす・つきだされる、つつく・つつかれる、ひっぱたく・ひっぱたかれる。

まるで、相撲です。というか、格闘技やプレーヤー同士が触れあうスポーツでは、双方向性と相互性がダイレクトかつダイナミックに起こります。肉体同士が触れあうどころか、もろにぶつかり合うのですから。

＊

なぐる・なぐられる、ひっぱる・ひっぱられる、つきだす・つきだされる、つつく・つつかれる、ひっぱたく・ひっぱたかれる。

言葉として読んでいるだけで体が火照ってきませんか？ 私なんか暗示にかかりやすいし、感情移入が激しいので、汗ばんできました。なにしろ単純なのです。

逆にいうと、格闘技とかを見るのが苦手です。顔をしかめながら見るタイプですから、やたら疲れてそのうち嫌になります。

最後まで見ることはめったにありません。あ、相撲は別です。すぐに終わっちゃいます。

＊

車の運転や機械の操作では、手や指をつかうのがいちばん多い気がします。あ、足もつかう場合がありますが、手と足はそっくりじゃないですか？

いつだったか、パソコンで、あるサイトに入るときのパスワードを忘れて、思いだすのに苦労したことがあります。しばらくつかっていないサイトだったのです。

数字とアルファベットの組み合わせだったのですが、頭が覚えていなくて焦りました。

指が覚えていた、手が覚えていた、まさにそんな感じなのです。何度も何度も、キーボードに指を走らせているうちにサイトに入れることができ、「やった」と叫んだのですが、久しぶりに利用したサイトだったので、入ったとたんに忘れていました。

偶然に正しいパスワードを入力したみたいでした。パスワードはどこかに書いておくべきです。体感ばかりに頼るとひどい目にあいます。

*

体感の話が多いですが、私は体感派ではありません。むしろ体感は鈍いほうです。

どんくさくて鈍感だと小さいころから言われつづけて、いまに至ります。なにかと感度が悪いみたいです。

スポーツはぜんぶ駄目、演奏できる楽器はなし（だいいち楽譜が読めません）。でも、自分にそなわった体と体感は大切にしたいです。贅沢は言いません。

ただ体感がおもしろくて仕方ないので、話のネタにしているだけです。体感って、素直で単純だし、おもしろくありませんか？

そのうち飽きると思います。

*

いまだに天動説を信じています。

こどもの頃には太陽や月や星が動いていると信じて疑いませんでした。まして地球が丸いなんて思いも考えもしませんでした。

いまはどうかといえば、揺れています。その時の気分で地動説と天動説のあいだを行ったり来たりしているのです。

地球が丸くて太陽の周りをまわっているという話は学校で習って知っていますが、どうしても地動説が体感できません。

「体は正直だよ」ってやつです。この言い方も、状況しだいではいやらしく聞こえますか？

でも、知識や情報の力は大きいです。学習の恐ろしさというか。こんな私でも、いちおう世間体を気にしますし……。

そんなわけで、地動説と天動説のあいだでいまでも揺れています。

*

ここまで白状したので告白しますが、「太陽」のことを、ふだんは「お日さま」と言っています。

「地球」は「球」ですから丸いという感じがして、やっぱり違和を覚えます。

本当は「地面」とか「地べた」がいいのですが、語呂が悪いので「この星」とよく言います。星は好きな言葉です。

*

指が覚えている、手が覚えている、足が覚えている、舌が覚えている、喉が覚えている、お腹が覚えている、皮膚（肌）が覚えている、体が覚えている。

覚えているだけでなく、考えているし、知らせたり、教えてもくれます。さとしてくれることさえ、あります。そんなことをしていると駄目だよ、と。

泣いたり、悲鳴を上げるのは、体調が悪かったり、病気になるとよく分かります。個人的な印象では、自分よりちょっと先に、泣くのです。

その差が「知らせる」なのでしょうか。体は心が準備する間（ま）を与えてくれるみたいです。助かります。

体感を裏切る発言や思考や行動をすると、体にもうしわけなく思う自分がいます。

体って意外と賢いんですよ。現在は体や体感が軽んじられ、ないがしろにされている時代だという気がします。

美容師さんから聞いた話なのですが、指がお客さんの頭の形を覚えているというのです。

店を変わって、別の店で初めて見るお客さんの頭をいじっていて、はっと思いだし、挨拶したそうです。

「〇〇さんですよ。お久しぶりです」

「あら、覚えていてくれたんですか？ よく分かったわね」

そのお客さんはちょっと不満げにそう言ったらしいのですが、じつは美容整形をしていたようなのです。

この話には感動しました。背後にそのお客さんのドラマを感じます。ちょっと細部を変えて、このエピソードを小説の中でつけたことがあります。

*

指が知っている、体が覚えている、体は正直だ、というお話でした。

「似ている」だけの世界

＊

＊「似ている」の世界の住人

人は「似ている」の世界に住んでいるようです。動植物の名前を思いうかべると、その根っこに「似ている」がある気がします。

まるであだ名のようなのです。つい笑ってしまうとか、ずいぶんひどい名前だなあ、失礼だなあと思うこともあります。悪意すら感じられるネーミングもあります。

生き物だけではなさそうです。山、川、池、岩、月の模様や雲の様子や星座までに、あだ名みたいな名前がついています。

生きていない物を、生きている物の名前にちなんで名づける。逆に、生き物に生きていない物の名前をかぶせて名づける場合もあります。

森羅万象に「似ている」を基本とした名前を付けることがある。やっぱり、人は「似ている」の世界に住んでいるようです。

＊「何かが」と「何かに」がない「似ている」

何かが何かに似ている。

これは、何かに何かを見ることですが、「何かが」と「何かに」がない「似ている」もある気がします。

言葉を離れるとか、言葉が意識されない状態です。もっと詳しく言うと、心が言葉と事物を離れてしまうのです。

ぼーっとしている状態です。それでいて意識はあります。ただ言葉が浮かんでいるわけではない。あれはあれだ、これはこれだと物や事をはっきりと意識しているわけではない。見えるけど凝視や注視しているわけではない。

こう言うと、なんだか危うい精神状態ではないかと思えますが、これが人にとっては自然体というか普通なのではないでしょうか。日常生活でよくある心もちなのです。

しょっちゅう言葉を意識していたり、言葉を意識しなくても、つねに「あれ」は「あれ」だ、うんうん、OK、「これ」は「これ」だ、そうそう、大丈夫大丈夫なんて確認していたら、疲れませんか？ 人は無駄に疲れないようにできている気がします。

うまく「スリープ」「待機中」の部分を脳につくっているのではないのでしょうか。部分的に、です。どこかは、しゃきっとしているのです。

たぶん意識はまだら状で、まばらな濃淡があるのだらうとイメージしています。その濃淡は時によって移り変わる気がします。

* 「似ている」のない世界

「似ている」は人の気持ちを静めます。何だか分かんないけど何となく「似ている」。この「似ている」が安心感を与えてくれるのです。

「似ている」は懐かしい気持ちでもあります。まだ言葉も知らず、事物という観念も知らなかった赤ちゃんだったころに、似ているものを目で追い、目でなぞっていたのがずっと記憶に残っているのかもしれない。

とはいえ、赤ちゃんを卒業した人なんていないのです。誰もが赤ちゃんの状態を死ぬまで大切に持っている気がします。

*

「似ている」のない世界を想像してみましょう。何一つ、見たこともない気がする世界です。言葉も浮かびません。形も姿も模様も景色も、統一感のないばらばらのものとして目に映るにちがいありません。

これまでのどの記憶にもない、見慣れないものだらけの世界にいきなり放りこまれた感じ。「何だ、あれば、何だ、これは」だらけで、それがずっと続くのです。

「ここは、どこなんだ？」でしょうね。いや、そう思う余裕もないかもしれません。きっと緊張の連続で疲れるでしょう。

そんな世界にいたら、心が壊れるにちがいありません。体も持たないはずです。想像しただけで全身に汗が出てきました。

*

私は「似ている」に囲まれているほうが安心します。いろんな名前に囲まれている、いまここが楽しいです。そんなふうにできているのしょう。

欲を言うならば、名前はあっても意識したくないです。「何かが」と「何かに」がない、ただ「似ている」――。

「似ている」だけの世界でぼーっとしてたいです。

曖昧な顔

＊

退屈なときには言葉に会いにいきます。辞書で好きな言葉を引き、その語義をながめるのですが、電子辞書だとその言葉のまわりにある親戚など、全体が見わたせません。私は意味を手早く調べるためには電子辞書を、読んだりながめるのには紙の辞書を、というふうにつかいわけています。

日本語では「かげ」を訪ねるのが好きです。何度会いにいったことか。ひらがなで二文字の「かげ」が部屋の扉になり、その「かげ」という名の扉を開けると、影、陰、蔭、翳が会釈しているのが見える。それぞれがいい顔をしていて、いい表情を見せてくれます。

読むというよりも少し目を離して見ているだけで心が安らぐのですが、顔を見にきたつもりがつい読んでしまい、時を忘れることもあります。「かげ」にとっては、読まれることは不本意であるにちがいません。かげは見るものなのです。

きょうは「かげ」のうちの「影」だけの顔を見えます。影は幼いころの記憶と結びついています。影ほどつねにそばにいて、不思議に思わせてくれる友達はいません。なにしろ、自分の影です。誰もが影を持っています。

いつもいっしょです。薄暗いところはもちろん、かなり暗いところでも影がいます。感じるというべきかもしれません。ひょっとすると影の気配が自分ではないかと考えることがあります。寝入り際にふいに訪れる考えなのです。

寝入り際には、このように昼間に考えると荒唐無稽に思えることがリアルに迫ってきます。

＊

辞書を見ていると「かげ・影」にはいくつもの語義がありますが、そのなかでも好きなイメージ二つとたわむれてみます。鏡や水面にうつる影、そして影絵のように壁や障子にうつる影の二つです。

鏡に映る自分、障子に写る自分の影のように、「うつる」が映ると写るというぐあいに移りかわるさまが面白くてわくわくします。こういうたわむれが好きなのです。言葉の音と文字と意味とイメージがからみ合っているのでしょうか。

こっちはながめているだけです。自分が参加しているとは思えません。映画を見ているのと似ています。映画には参加はできませんから。一方的だという点では、映画は夢に似ていますが、夢はもっと荒唐無稽で強引で、有無を言わせないところがあります。

人は影をつくったり、影を見ることができても、影そのものにはなれないようです。人はつねに見る側にいるからです。人が見なくなったとき、たぶん人ではなくなっているはずですが、もちろん、いまのは比喻であって、視覚や視力のことではありません。

＊

数年前に犬を飼っていたことがありました。窓際に置いたケージというか、サークルに入れておくと、退屈そうにしている犬が、動きながら自分の影や、柵がつくる影の模様をよく目で追っていました。

どんな思いでいるのだろうか？　どんなふうに、その目にうつっているのだろうか？
動きだけを追っているのだろうか？　そもそも色はどんなふうに認識されているのか？

そのうち、犬がこっちの視線に気づいて、こっちに目線をうつします。目と目が合います。その目の表情に負けて、サークルから出してやったり、抱きかかえることがありました。

ほとんど黒目ばかりとっていい目なのですが、濡れてきらきら光る瞳にこっちの顔がうつっていて、どきりとしたことを思い出します。そういう瞬間には相手が犬だとは思えません。

影を感じる相手とは、うつるの関係にあるような気がします。うつるの関係とは、相手とのあいだに血縁に似たつながりがあって、同じ夢を見るほどのきずなで結ばれているという意味ですが、悲しいかな、これは一方的な思いでしかないようです。

誰かと同じ夢を見るというのは、それこそ、ありえない夢なのです。夢はひとりで見るものです。いや、誰かとともに見る夢とはうつつのことのもかもしれません。

誰かとどころか、集団で見る夢がうつつ。うつつから夢うつつをへて覚めて、ようやく人はひとりになれる。これが夢です。

そう考えると、夢こそがくつろぎの時だと考えられます。ほんとうに、そうなのでしょうか？ 考えれば考えるほど悲しい考えです。

*

あの時に犬の目に見たものも影なのですね。一方的な思いでしかない、夢。

というか、学校の理科で習った網膜とかいうものを考えると、私たちの見ているものはすべてが影であるということになりそうです。水晶体——なんと綺麗な言葉なのでしょう——というレンズを通して網膜にうつった影を見る仕組みが、目ということでしょうか。

影が影を見ている。映画も影、テレビも影、液晶の画面にうつった映像も文字も影。音も機械で再生され複製された音（こだま・木霊）という影。耳という影が影を聴いている。

影の影の影みたいにつながっているのが、人と人、人と物、人と生き物との関係なのかもしれません。影の影の影。もし、そんなものがあるとすれば、だんだん薄くなっていくような気がします。

夢に夢見るにも似ていますが、言葉を重ねると、濃くなるどころか、薄くなっていくようです。言葉自体が現実には永遠に追いつけない、まばらでまだらな影なのですから、

重ねあわせると、それだけ不透明になるのです。

濃いのが反対が薄いというのは言葉の綾だと分かります。現実には割りきれない曖昧なもの。すっきりした言葉は現実から遠ざかっている印でしょう。

＊

影である言葉を重ねることで、伝言ゲームや糸電話みたいにだんだん頼りなくなっていく感じ。濃いのは薄い。薄いのは濃い。

かげがうつる。かげがうつろう。かげがかげる。かげがうすい。うすばかげろう。かげろう。眠くなると、そんなふうには、連想ゲームをしていきます。かげろうが出てきました。

かげろうって何でしたっけ？ 辞書で調べてみます。

「かげろう」が四つありました。陽炎、蜉蝣・蜻蛉、陰郎、影ろふ・陰ろふ。

思い出しました。見覚えがあります。意味はどうでもいいのです。大切なのは顔です。「かげ」とその親戚はどれも曖昧な顔をしています。だから好きなのだと思います。

「あなたの好きになる人は、きまって曖昧な顔をしていますね」

むかし、そう言われたことを思い出しました。

やっぱり見えます。

＊

やっぱり見えます。人の顔です。似た人を知っています。何を見ているのかと申しますと、天井の染みなのです。二十年以上前から、そこにあります。何度見たか知りません。やっぱり見えます。見ないつもりでも、見てしまいます。

よく考えれば、テレビも、映画も、写真も、絵も、パソコンのモニターも、「それ」そのもの」ではないにもかかわらず、「それ」を見てしまうという錯覚を利用したものです。でも、それは意図的にそうなっているのであって、不意に出あってしまうという体験をしているわけではありません。

それなのに、出あってしまう。出あってしまった。出あってしまうだろう。出あってしまうかもしれない。そんなことがあります。人をやっている以上は、あります。何か何かを見る。これって、人である限り仕方がないみたいです。ネガティブに、つまりマイナス思考で、とらえることはないのです。

たとえば、不意をつかれたとしても、正々堂々と出あってしまえばいいのです。

そういう体験の恥ずかしさや後ろめたさやかっこ悪さや不安を、薄めるためのいい言葉、つまりおまじないの言葉があります。それは「あらわれる」です。

「○○が出る・出た」とか、「○○が見える・見えた」の代わりに「○○があらわれる・あらわれた」と、するだけでいいのです。「見える・見えた」が自分の責任なのかどうかは、誰にも分からないと思いますが、とにかく責任を転嫁するのです。

それは「出た」のでも「見えた」のでもなく、「あらわれた」のです。思うだけでなく、ちゃんと声を出して唱える。それだけで、だいぶ気が楽になりませんか？

このように言葉は、ときとして人を助けたり救ってくれます。あの天井の染みのなかに見える人の顔は、「あらわれている」のだ。そう思うと、気持ちがいくぶん、やわらぎます。

ところが、同時にぞくっとくるのです。こっちに落ち度はない。責任はない。そこまではいいです。じゃあ、なぜ？ でも、なぜ？ なぜ、「あらわれる」の？

責任だか何だか分からないものを転嫁した、つまり押し付けたのはいいけれど、その「押し付けられたもの」あるいは「押し付けたこと」が気になってくるのです。なぜ？ どうしてなの？ 何が起こって、そうになっているわけ？

こういうことは、深く考えることではなさそうです。考えてみても、いいことなど、これっぽっちもないみたいだからです。だから、安心してください。あなたに責任はありません。あらわれるのです。

もののあらわれ

＊

辞書を読んだり眺めるのが好きです。最近小説を読むよりも、そうしている時間が長くなってきました。ある語の見出しの欄だけでなく、あちこちの語に飛んだりもします。ある語の周辺を眺めることもあります。

先日、使い慣れた広辞苑で「もの・物」と「もの・者」という語の欄を見ていて、たまたま「ものの」というつながりの言い回しに目が行ったので、集中的に目を通していました。以下に、気になったものを挙げてみます。

ものあなた・物の彼方、ものあわれ・物の哀れ、ものきこえ・物の聞こえ、ものけ・物の怪、ものけだつ・物の怪だつ、ものな・物の名、ものね・物の音、ものべ・物部、ものほん・物の本、ものまぎれ・物の紛れ、ものめ・物の芽

とくに気になったのは、「ものな・物の名」と「ものね・物の音」のペアです。ペアなんて勝手にまとめましたが、関連はなさそうです。私の楽しみは、その語義を読んだから、勝手にイメージを膨らませることです。個人的な改変と言えます。

ひとさまに迷惑がかからないように、密かに自分のイメージを当てて読んで楽しむのです。

物の名

物の音

物の声

声を一音で読みたいのですが、浮かびません。

＊

「ものあわれ・物の哀れ」はよく知られたフレーズですね。あらためてその語義を読んで感心しました。

いろいろ書いてありましたが、「もの」すなわち対象客観と、「あはれ」すなわち感情主観の一致する所に生ずる調和的情趣の世界。」という説明は、対句を用いて最後に統合する手際が見事だと思いました。

そう言えば、「ものあわれ・物哀れ」という言い方を知ったのがその日の収穫でした。「何となくあわれなこと。何となく感慨深いさま。」なのだそうです。「の」があるかないかだけの違いなのに、「ものあわれ」とは語義がずいぶん違いますが、そんな違いに感動しました。

言葉というものは不思議なことだらけです。

ところで、「ものあわれ」と言えば、私にとっては「ものあわれ」なのです。勝手に連想して、自分語みたいにフレーズ化しているだけですけど。

たとえば、「聖なるものあわれ」とか「～するものあわれ」みたいに言われることはあっても、単に「ものあわれ」というふうにつかわれることは、なさそうだという意味です。

*

とはいうものの、「ものあわれ」というフレーズに決まった意味を設定しているわけではありません。なんとなく、「ものあわれ」という音と文字列を自分でときおり思いうかべて、物思いにふけるくらいのもんです。

もの、こと、さま。

私の印象では、「もの」は「あられる」ものであり、「こと」は「あられる」ものではありません。個人的なイメージでの話です。ひとさまのイメージは知りません。私にとって、イメージとは個人的で私的なものです。自分の中でも刻々と移り変わる気もします。

「さま」は、あらわれているものなので、「さま」が「あらわれる」というのは当たり前と言えますが、これも私のイメージでしかありません。

さらに言うと、私にとって「こと」は「わかる」し「わかる」ものです。

ことわけ・事訳、ことわけ・辞別け・言別け。

上の言い方が辞書にあるからでしょう。

物分かり、物別れ・物分れ。

こういうのも辞書にはあるのですが、見なかったことにして忘れます。ひとり遊びですから、じつにいい加減。辞書ではその直後に、

物忘れ、物侘しい、物侘しら、物笑い

と続きます。私が小説よりも辞書を読むようになったのは、不意にこういう「もの」が「あらわれる」からです。

＊

話を戻します。

ことわり・理、ことわり・断り・事割り。

これも好きな言葉ですが、個人的には「言割り」もつかうことがあります。私のパソコンの入力ソフトには、こういう自分だけつかっている候補が出てきます。

げんかい、言界、現界、限界、幻界、滅界、弦界、絃界……。

こんなふうに登録されています。ときどき、自分語かどうか分らなくなりますけど、そういうときには辞書に当たります。当たると言っても、腹を立てて辞書に当たるわけではありません。調べるという意味です。当たり前ですよ。

＊

「もののあらわれ」に話を戻します。

私にとって、「もののあらわれ」と、一字（一音）違いの「もののあわれ」とはかなり違っています。むしろ「もののけ・物の怪」に近いのです。

「物の怪」は、広辞苑では「死霊・生霊などが祟（たた）ること。また、その死霊・生霊。邪気。」と説明されています。恐ろしいですね。共同体に共有されているイメージの怖さを感じます。

同時に、共有されたイメージには安心感も覚えます。「みんなのもの」だからです。

一方、私の言う「もののあらわれ」は個人的なものです。ある意味孤立無援。自分しか受けない孤独なギャグに似ています。この「もののあらわれ」みたいに。

＊

堂々巡りになってきましたので、簡単に説明します。

「もの」が何らかの意味とかメッセージとかイメージのようなものを持って目に「見えてくる」という感じ。音やにおいや感触や味として「あらわれる」のも有りです。あと気配も有りです。

自分でつくった言い回しに「有り」だなんて、世話ないですよ。自分でもそう思います。

いずれにせよ、「もののあらわれ」はその人にとっては深刻な問題だという点がきわめて大切です。それがあらわれたときには、当人にとってはリアルなのですから。リアルとは客観的なものではないと思います。そもそも客観とは、文字どおり自分の外、つまり他人事なのです。

「もののあらわれ」は、物の怪と違って他の人といっしょに「これって、めちゃくちゃ怖いよね」なんて具合に共有できないのです。共同体の悪夢ではなく、あくまでもパーソナルな問題だと言えます。

誰も理解してくれません。ひとりで向かわなければならぬ相手なのです。鬼とか、妖怪とか、妖精のほうがましかもしれませんが、でも自分のところだけに来てくれるのです。その意味では限りなく、いとoshii。

だから、声を掛けるなり呼び掛けるなりして、てなずければいいのです。外にある物とは異なり、内にある「もの」ですから、きつとなついてくれると思います。

痛みをつたえる名文

＊

自分の感じる痛みをお医者さんや他人につたえるときに、どうしますか？ 錐で刺すような頭痛、分厚い布団で上から締めつけられているみたいな胸の苦しさ、針の上で寝ているような全身の痛み——みたいに、「〇〇のような」とか「〇〇みたいに」と比喩をもちいるのが一つの方法だと思います。

ちくちく、ちくりちくり、ずきずき、がんがん痛む、ひりひり、ずきんずきん——のように擬態語をつかうこともできますね。日本語はこういう擬態語や擬声語が豊かで助かります。かなり正確に痛みを伝えられそうな気がします。たとえば英語では、そんなに豊富ではないようです。

ちくちく、じんじん、きりきり痛むなんて、口に出してそう言っただけでそうした痛みが感じられるようで眉をしかめてしまう自分がいます。暗示にかかりやすいのです。

＊

痛みを表現するのがもっとも得意な手段は何でしょう？ 絵や写真、そして映画や動画の映像のように視覚に訴えるとか、話し言葉や書き言葉をもちいる、あるいは音楽や音といった方法が考えられます。

映像なら、痛くさせている原因となる物や状況と痛がっている人とその様子を描いたり映したりするのでしょうね。苦痛に歪む顔とか、ナイフが皮膚に刺さる場面とか、人がナイフを振りかざす姿のナイフだけが大写しにされるショットが考えられますし、あと血の飛び散った壁だけが写しだされるとか、漫画だと「ぎゃあああ!!!」なんて吹き出しだけのコマを、じっさいに見た覚えがあります。

見ているとこっちまで同じ顔つきになったり、瞬間的に写っていない部分が見えたりして、痛さがつたわってくるような気がします。敏感な人は気絶するかもしれません。

映画で見るこうしたシーンやショットの特徴は、顔だけとか、目だけとか、口だけとか、身体の一部だけがクローズアップされることです。全部は見せない。ここがポイントです。映画でも小説でもあります。たしか修辞学的な用語もあったはずですが、専門用語は苦手なで忘れてしまったので、手持ちの言葉と言い回しで説明を続けます。

要するに、ほのめかすのです。一部分だけを映像や文章で見せて、全体像やその状況を見る者や読む者の想像力にまかせるわけです。なぜこうするかというと、そのほうがずっと怖いし痛く感じるからです。性的な表現と同じです。ちょっとだけのほうが数段エロいですね。この「ちょっとだけ」は痛みや苦しみにもきわめて効果的なのです。

こうしたテクニックというか塩梅をうまくつかえる作り手が良質の作品を制作できるのでしょうね。もろに出しては興ざめなのです。ま、最初は食い入るように見たり読むでしょうが、すぐに飽きるという意味です。

映画でこの種のテクニックがうまいのはアルフレッド・ヒッチコックではないでしょうか。シーンはシンプルなのに痛いし怖いしぞくぞくわくわくします。しかも飽きません。何度も鑑賞できます。

＊

痛みや苦しみを見せるための映画といえば、ホラー映画やスプラッター映画でしょう。私はこういうジャンルがきよくたんに苦手なでほとんど見たことがないので、残念ながらここでは扱えません。

ただし、スティーヴン・キングの小説や、それが原作である映画は好きです。キングの小説は一時期、新刊が出るたびに買っていたので、いまも段ボール箱にいっぱいあります。あと、ホラーやスプラッターの要素がある小説だと、村上龍と江戸川乱歩を挙げないわけにはいきません。

スティーヴン・キングは状況や設定で読ませます。痛みというよりも広義の苦しみや恐怖が描かれている作品で傑作だと思うのは、長編では『ミザリー』、中編の『超高層ビルの恐怖』、短編だと『第四解剖室』です。

村上龍は身体に訴えるパワフルな描写で読者を圧倒します。痛みと苦しみに焦点を当ててなら、お薦めは『コインロッカー・ベイビーズ』、『イビサ』、『トパーズ』（短編集）、『インザ・ミソスープ』です。

江戸川乱歩は奇想と何げない文章で読者を悪夢にさそいます。肩に力が入っていないようで凝っているとか、巧まないようでじつは巧んでいる文体が特徴です。痛いよりも切なくて苦しいが得意だと思います。『鏡地獄』『踊る一寸法師』『芋虫』『人間椅子』といった短編が読みやすいです。

＊

言葉の喚起する痛みのすごさを実感するには、日本語を母語とする人にはやはり擬態語とその関連語がいちばんではないでしょうか。そのすごさを実感するためにお薦めしたいのが、辞書の説明と例文です。

ちくちく、ちくりちくり、ずきずき、ずきんずきん、しくしく、ひりひり、がんがん、しみる、ひりつく、差しこむ、うずく——で試してみてください。例を挙げます。

- ・ 錐をもみ込まれるように鋭い痛みが持続するさま。「胃がきりきりする」【広辞苑より】
- ・ 傷口などが脈打つように絶えず痛むさま。「虫歯がずきずき（と）痛む」「頭がずきずきする」【デジタル大辞泉より】

名文だと思います（きりきりの項で「錐をもみ込まれるように」とあったのには笑いそうになりましたが）。シンプルです。読んで痛くなります。飽きません。声に出して読みたい名文ではありますが、パニックというか突然の悪夢を誘発する恐れがあるので、暗唱はお薦めできません。

漢字の顔と表情

＊

漢字には感字の側面があるように思います。ひらがなやカタカナを見ると、それが形であることを忘れて、音に直して自分の中に入れていく気がすることがあります。

漢字はその形がダイレクトに目に入ります。暴力的に入ってくると感じることもさへあります。

痛い、いたい、イタイ、イタイ

並べてみると「痛い」がいちばん痛いです。イタイが目について痛いのはいたいイタイ病という言葉があるからかもしれません。ところで、「痛々しい」というと「かわいそう」という意味になるのは興味深いです。心が痛むということですね。

＊

五感が響き合う、つまり五感を別個のものとは感じないというのは、誰もが何かの形で日々経験しているのではないのでしょうか。べつに超常現象とか神秘体験などではありません。そもそもヒトにとって五感は独立したものではないはずなのです。

たとえば、テレビで手術の場面を見て痛いと感じれば、それは視覚や聴覚（メスが皮膚を切り裂く音、ジーッという電気メスの音、手術室の扉閉まる音……）によって痛覚にスイッチが入ったのかもしれませんが。同じ場面を見た別の人は、強い耳鳴りに襲われるかもしれません。口に酸っぱいものを感じて吐き気を覚える人もいるでしょう。視覚的なフラッシュバックを経験する人がいてもおかしくはない気がします。病院独特の匂いが急に嗅覚をはじめ聴覚や視覚や触覚や味覚を刺激することも考えられます。

＊

上の文章では、漢字をやや多めにしてあります。読むというよりも、目を細めて漢字だけの字面を見ても、なんだか厳めしいし痛い感じがしませんか？

＊

言葉で、痛くなることがある。きりきりしたり、ずきずきしたり、ちくちくすることがある。気持ちよくなることもある。せつなくなって涙がこぼれることがある。色が見えることがある。苦しくなることがある。においを感じることもある。むずむずしたり、ひりひりすることがある。お腹が鳴ることがある。誰かの声がするような気持ちになることがある。背中を撫でられたような気がする。足もとをすくわれたような感覚に陥ったことがある。体がほてってぼかぼかしてくることがある。

＊

今度の上の文章では漢字が少なめなのですが、とくに「きりきりしたり、ずきずきしたり、ちくちくする」の箇所を声に出して読むと、痛みを思いだしてたまらない気持ちになります。ダイレクトに痛みが目に飛びこんでくる感じはしません。全体的にひらがなが多いので、やさしくやわらかい感じがしませんか？

＊

漢字が感字であるのは、「絵」だからという気がします。絵は有無を言わずにざり入ってきます。どこに、身体です。

腹痛、胃痛、歯痛、頭痛、腰痛、胸痛——痛む箇所が一目瞭然です。

疼痛、激痛、劇痛、鈍痛——どんなふうに痛いかがよくわかります。

苦痛、心痛、沈痛、悲痛、哀痛——見ただけで心が苦しくなってきました。

鎮痛、鎮痛剤、緩和ケア——見ていると痛みがおさまるような気持ちになります。

痛快、痛切、痛飲、痛烈——程度が「いたく」つまり「激しく」迫ってきます。

漢字は絵であり顔でもあると思います。その字面に表情を感じるのです。顔が痛いと言っているのです。

＊

人は痛みから逃れられません。私はこれまでにいろいろな病気になり、いまもかかえ、さまざまな痛みと苦しみを経験してきました。これからも、痛みと付きあって生きなければなりません。

やはりすぎるのはお医者さんとお薬です。もちろん、看護師さんや薬剤師さん療法士さんを忘れてはなりません。入院をすると、いかに多くのスタッフにささえられているかがわかります。

医方、漢方、和方、医学、医術、蘭学、独逸医学、現代医療、現代医学、東洋医学、西洋医学——。医学や医療ではじつに多くの漢字がつかわれています。カタカタの専門用語も多いですね。

言葉が「外」から入ってきたのと同様に、古来から医学と医療ではさまざまな国々や地域の技術が導入されてきたのでしょう。

杉田玄白と前野良沢などが並々ならぬ苦勞をして『ターヘル・アナトミア』を翻訳したという話を思い出します。その成果が『解体新書』ですね。言葉と医学・医療は密接に結びついています。

＊

「どこが痛みますか?」「どんなふうに痛みますか?」

お医者さんが問診で尋ねる言葉です。私たちはそれに対して、体の部位と、ずきずきとかきりきりといった言い回しで答えます。いまではお医者さんはパソコンでカルテを書いています。つい遠慮して、画面にはあまり目をやらないようにしているのですが、ちらりと見るとそこには漢字とカタカナがあります。

数字を忘れていました。数字も文字で、顔と表情があります。ある検査項目の数字が、ある患者にとっては痛さや苦しみの印となるという意味です。私にも心当たりがあります。数字に一喜一憂するわけです。

かつてうちのかかりつけだったお医者さんは、外国語でカルテを書いていたらしい

ました。筆記体でした。女性で、数年前に百歳ちかい高齢で亡くなったのですが、あのカルテは、英語だったのかドイツ語だったのか。字面が思い出せません。目に浮かぶのは先生のやさしい顔と表情だけなのです。

「はかる」と「わかる」に囲まれて生きる

＊

「わかる」と「はかる」は字面と発音が似ていますが、「わかる」にくらべて、「はかる」はあまり考えたことがありません。でも、身のまわりを見ると「わかる」だけでなく「はかる」が多いのに驚きます。

とくに、病気になったり老いると「はかる」を意識するようになります。病院に行くとわかりますが、検査は「はかる」のデパートです。「はかる」をたくさんして、その結果が「わかる」というわけです。尿検査だけでも、たくさんの「はかる」があり「わかる」があるようです。結果の項目（リスト）を見るとわかります。

それにいまは、家でも毎日体温を測っています。はかればわかって安心するわけです。いや、「はかる」の結果をわかりたくないと思うときが、ままありますね。気が滅入りそうなので、思い出話をします。

＊

いまになって思うと、学校という場所は「はかる」と「わかる」に満ちあふれていました。そもそも、学校は「わかる」と「はかる」に二分されると言ってもいいのではないのでしょうか。

なにしろ、はかるとわかる、はかるはわかる、なのです。恐ろしいことですけど。「はかる」は、ほんわかとした、いいこと尽くめではないのです。

黒板と教科書とノートをつかってのお勉強は、たいていが「わかる」ためです。理科の実験・観察や体育や家庭科や図工なんかは、だいたい「はかる」の世界です。

保健室も「はかる」の領域という感じがしませんか。体温計、体重計、そして何と呼ぶのか知りませんが、身長や座高を測る計器が置いてあるところです。そして最後は通知表で、これが「はかる」の総決算になるのです。

はかられる気分は決していいものではありません。少なくとも私には悲しい思い出しかありません。人間が数字に還元されるのですから。

飛躍するようですが、一足す一は二というのと同じで、事物や生き物の個性を消すのが「はかる」なのです。数字になるとは、個性を消されることにほかなりません。

はかる行為が、例の殺伐とした残酷な風景と究極においてつながっていることを忘れてはならないと思います。死者〇〇名とか負傷者〇〇名という具合に……。「死する」と「負傷する」が殺伐として残酷なわけではありません。数字として「処理される」ことのほうです。

*

体育も「はかる」の世界です。というか、「はかる」そのものが体育だという印象があります。しかも「はかる」だけではなくて、「くらべる」のです。そして「きそう」のです。嫌でした。

大学に進学して一般教養の科目として体育があると知ったときには、度肝を抜かれました。「うそー。だまされたー」という気がして、しばらく立ちなおれませんでした。私にしてみれば、まさに、はかられたのですから。

高校を卒業して嬉しかったことのベスト3に、体育とのお別れがあったからです。そう信じて疑っていなかったのです。なのに、大学にまで体育がついて来たのです。ショックでした。

それで思い出しましたが、大学の入学式のすぐあとに身体測定兼体力測定があったのです。その会場の雰囲気、すごく嫌でした。体育会系の部やサークルの連中らしき者たちが、当たり前みたいな顔をして場内をうろついているのです。そして握力や背筋力や肺活量などをはかる計器のそばで、新入生たちを物色しているのです。

ドナドナドーナ、ドーナという悲しげなメロディーが頭の中で鳴り響いていた記憶があります。売られていく家畜になったような、切ない気分になりました。

でも幸いなことに、運動能力とか体力とか腕力のたぐいには全然自信がなかった私は、見向きもされませんでした。特に握力形の数値を見たある上級生が「嘘だろ」とか何とかつぶやいたのには一瞬むかっとしましたが、すぐさまほっとしました。「僕は売れそうもない。よかった——」

*

「はかる」をわけてみましょう。分けるのです。「はかる」と「数値化する」を分けたいのです。お金で考えてみます。値踏みという言葉がありますね。値踏みはお金という数値に置き換えることですが、お金という数字に置き換えた瞬間に、「はかる」が「わかる」に変わっているのではないのでしょうか。

値段が決まるまえに「ああでもないこうでもない」がありますが、それが「はかる」だという気がします。ある意味、優柔不断でとりとめがないのが「はかる」なのです。優柔不断でとりとめがないと言われつづけてきた私は、親しみを覚えます。

「値踏み」や「値を踏む」のこの「踏む」とは、地面の土を足の裏で押すことにほかなりません。野菜や果物のできぐあいを目をつむって押してみる。スーパーでラップにくるまれたお肉や魚をこっそりと押してみる。あれと基本的に同じです。

人が身体をつかって「おしはかっている」のです。指や手、足の裏や足の指という繊細なセンサーがついてる末端で「押す」「推す」わけです。「今年は○が優勝すると踏んだ」なんていう場合の「踏む」は「おしはかる」「はかる」ときわめて近い気がします。

走り幅跳びとか走り高跳びのスタート地点付近で足踏みみたいな仕草をする選手がいますが、あれも踏んでいるし、はかっているのでしょう。間合いとか土のぐあいとか風向きや風の強さとか自分の中の「何か」とか観衆の圧とか、そういうものをはかっているにちがいません。

結果としての数字つまり記録は後でやって来ます。「わかる」は後に来るのです。わかるまではどきどきでしょうね。わかって喜んだりがっかりしたり……。

足踏みという言葉とイメージが好きです。えんえんと足踏みをしている。前には進んでいない。べつに踏ん張らなくてもいい。えいえんにわからないまま。たぶん、わかることを放棄している。ふんでいるだけでいい。自分の人生みたいで親しみを覚えるのです。

あいまいでやさしい境

＊

小学校の低学年のころに、市内の書店からカレンダーをもらって勉強机の前の壁に貼っていました。世界地図が大きく載っていて、カレンダーの部分は下の方に小さく印刷されているだけでした。

この地図は中学生になっても貼っていて、よくながめました。メルカトル図法なので、北極地方や南極大陸がぼかでかく見えるのです。地球儀は高価で買ってもらえなかったのですが、その存在は知っていました。それなのに、目の前のぼかでかい両極をリアルに感じていました。

地図というのは不思議なものです。いまでも不思議でなりません。立体的な地形と地勢を平面上に描いてあります。地球規模でいえば、球を広げた形で平面化してあるわけで、生き物の皮を剥いでその皮を壁に貼ってあるようなものです。

＊

メルカトル図法の世界地図をながめながら、大陸、半島、列島、島の形を見て、あれこれ思いをめぐらしているなかで、経線緯線、赤道、日付変更線、国境に目が行き、どうということなのだろう、何なんだろうと考えていた記憶があります。

何を考えていたのかは覚えていません。記憶はあるけど覚えていないというやつです。

大人になり、老年になったいま、あらためて地図帳の世界地図をながめています。あと日本地図や道路マップもそばに置いています。

やっぱり地図って不思議でなりません。

＊

目立つのは直線です。経線緯線、国境、県境、道路、線路、川。いびつな形の中にある直線は異様といえば異様です。そもそも自然界には直線はあまり見えないからでしょう。

外に出て空を見ると、電線、電柱、飛行機の飛んだ跡の白い線。まわりには、道路、建物、家屋、標識、看板、駐車場や駐車スペースの仕切り、ガードレール。どれもが人のつくったものです。

世界地図で国境に注目すると、直線が目立つのはなんとといってもアフリカです。あと中東のある部分も。まだまだあります。歴史的経緯から、いまは少しずれて歪んではいませんが隣国にもあります。

北アメリカの国境には不自然に長く伸びる直線が目立ちます。米国の州境を見て既視感を覚えたので何だろうと考えているうちに、アフリカ大陸に見られる数々の国境にとても似ていることに気づきました。

そっくりなのです。アメリカとアフリカが、なぜかそっくり。文字でも音でもそっくりじゃないですか。頭では違うって知っていても、字面と発音がそっくり。

抽象だからでしょう。数字がそうです。

抽象的なものは、人の目には似ていたり、そっくりだったりします。だから簡単に複製ができるし、数字として簡単に処理も処分も廃棄もできます。何をって、人を、人がです。個性が消えているからかもしれません。顔が見えないのです。顔が見えないものや顔が感じられないものに対して、人は冷淡で残酷になります。

ニワトリやサンマの顔が見分けられますか？ 私にはそっくりに見えます。

＊

話をもどします。北アメリカやアフリカの国境には不自然に長く伸びる直線が目立つという話でしたね。

切り分けたのでしょう。切るためには直線が必要です。刃物は直線部分があります。ぴんと張った細い紐でも切れますね。手術でもある部分に糸を巻いて両方から引っばって切断していたような気がします。

縄張りを思い出します。縄を張って直線をつくり、こっちはわたしのものとか「うち」、あっちはおまえのものとか「よそ」と決めるイメージです。張る、切る、分ける。張り切って分けていたのでしょうかね。

分ける、切る。やっぱり、これは人の中にあるのでしょうか。欲求とか欲望のことです。それが直線や長方形や四角という形として、人から出てくる、というか人がつくる。直線や角があるものは、人がいる、あるいはいたという印なのです。自然界にはあまりない。人は反自然であり不自然ですから。

見れば見るほど、直線からなる国境や州境は、鋭利な刃物で切られた切断面を連想させます。おびただしい量の血が流れたはず。数えきれない人たちが死んだはず。

＊

見れば見るほど、国と国の境が直線で区切られているのは不自然な気がします。もともと人間が不自然で反自然だと考えれば不自然ではないのですけど……。その不自然さは、コンビニや量販店にずらりと並ぶ商品の大半が四角であるのと似ています。人がつくるものは四角いのです。

たぶん、規格化された製品を大量生産にするためには、直線で切って四角いものをつくるやり方が適しているのでしょう。処理や作業がしやすいにちがいありません。さもないければ、あんなに整然とした角（かど・かく）があつて四角い物たちがあんなにたくさん存在し、それが直方体の箱たちに詰められて運ばれたりはしません。

とはいっても、専門家ではないので、見て思っただけです。印象にすぎません。

＊

日本地図を見ていると、県境の形に目が行きます。かつて都が置かれたあたり、いま

置かれているあたり、戦国の武将がいたあたりは、いびつに見え、その周辺や辺境になると直線が多いような気がします。いや、よく見ると直線に見えるのは山脈や川を境にしたからかもしれません。それなら納得できます。

道路に目を転じると、そうした周辺や縁へといたるたくさんの道が直線なのは何もないところにつくったからでしょうか。当たり前といえば当たり前、不思議といえば不思議。

かつての都の街路は碁盤の目のように整然としています。そこから遠く離れた北の大都市もやはり直線できれいに区切られています。なんでそうなっているのかは、小学校や中学校の社会科あたりで習った気がします。

外国の都や都市、しかも先進国のそれを真似たらしいという話。まつごと（政治や体制）やあきない（経済や交易）の匂いがします。こうした整然とした美しさには特有のきな臭さがあり、同時に美しい建造物を築きあげた人びとの汗や血や涙の匂いも漂います。

理屈、抽象、概念といったものと、具体的な形や線や匂いとのあいだを行ったり来たりする。知識や情報と、印象やイメージとのあいだで揺れる。そういう曖昧な境が心地よく感じられます。すばっときれいに切る必要はないのです。境は曖昧なほうがやさしい気がしませんか。

数学の修辞学

＊

寝入り際に宇宙の果てについて考えることがありますか？ どうなっているのだろう。あるところでふかぶか浮かんでいる自分を想像します。その一メートル先が宇宙の限界だったとしたら？

興奮して眠られなくなることもあります。無限、限りがない、果て、といったイメージを、子どものころからあれこれ想像し、わくわくしたり、びびったり、考えあぐんで眠くなったことが何度もありました。

不思議でならなかったり、気になって仕方がないことが、急に頭に浮かんで目が冴えてしまうことがあります。ややこしいことだから、なるべくかかわらないようにしているのに、とうとつに出てくるのです。

で、「その一メートル先が宇宙の限界だったとしたら？」ですが、その先は「ない」のだとしたら、それは人にとっての「ない」という言葉と、「ない」についてのイメージで、「ない」と決めるしかないという気がします。

つまり、あくまでも言葉とイメージ（レトリックでも詩学でもいいです）の問題ではないでしょうか。その先は人でなくなると、とらえられないかもしれません。

人でなくなると、とらえられないなんて、いま、しれっと書きましたが、人の外、人外に出るなどと言っても、それもまた言葉とイメージをもちいて騙る（語るではなく）行為でしかないのでしょうかね。

まさに果てを目の前にした気分。気づいていないだけで、果てはどこにでも転がっている気がしてきました。世界は果てだらけ、宇宙は果てだらけ。

＊

数学の微分で、方程式をグラフに描くと曲線になって、その曲線の微小な部分を拡大すると直線に見えるというような話があったように記憶しています。理屈というのには、あまりにも適当でいい加減に感じられて、一種の面白いお話として受けとめてきました。

数学に対して、自分が勝手にいだいているイメージを裏切るほどのテキトーぶりなのです。数学って、こんなに感覚的なものでしたっけ。もっと冷徹かつ緻密で、感覚などという曖昧なものを排除したガチガチの論理で成りたっているものだと勝手にイメージしていました。

いまPCに向かって文章を書きながら、あたりを見回すと、あちこちに曲線が見えます。目の前にもありました。PCのモニターに映し出されている活字は直線と曲線から成りたっています。また、PCの脇に家のカギが置いてあるのですが、それには細い紐と鈴がついています。

紐は細い糸を編んだもののようです。その紐が曲線を描いています。虫眼鏡でその紐の曲線部分を拡大してみると、確かに直線に見えます。ここで、大切なのは、「見える」です。

微分では、方程式をグラフにした場合の曲線を拡大すると「直線になる」とは言っていない感じがします。あくまでも「直線に見える」だったと記憶しています。

「見える」なんて、すごくテキトーじゃありませんか。それとも、そんなことはないのでしょうか。この種の疑問を質問できる相手がないので、どうなのかは分かりません。

＊

連想が働いたらしく、いま思い出しましたが「限りなく0に近づける」というフレーズも頭に残っています。前後関係は忘れました。数学の授業でよく耳にしたり、目にしたフレーズです。

微分だけではなく、数学の違った分野でも見聞きした感じがします。物理の授業でのこ

とだったという気がします。

数学も物理も、両方とも苦しくて退屈な授業だったので、混同しているのかもしれませんが。ですから、記憶違いである可能性は高いです。いずれにせよ、もしも数学にそういう言い回しがあるとするなら、これまた感覚的な気がします。

「限りなく」ですよ。詩や宗教や哲学や広告のコピーみたいじゃありませんか。限りなく透明に近いイエローでホワイトでちょっとブルースみたい。

*

また思い出しました。「無限大」って言葉がありました。「 ∞ 」なんて立派な記号まであったのも思い出しました（「8」を連想しアラン・ロブ＝グリエまで頭に浮かんできます）。ということは「無限小」ってのもあるのかしらん。

これはどう考えても、やっぱり、印象の世界というか感覚的なようです。漠然と考えていたことを、こうやって文章にしてみると、ますます、そうした思いが強くなりました。

そういえば、数学は詩であるなんて何かで読んだ気もしてきました。それとも数学は宗教である、数学は言葉である、数学は哲学である、だったかしら。

いずれにせよ、そうであれば、感覚的であってもいっこうに不思議はないわけですけど。そうでないものを数学に期待していた、このアホがアホであったと分かっただけでも、きょうの収穫と考えましょうか。

*

で、思ったのですが、数学はレトリックである、つまり言葉の綾であるなんて言えそうじゃありませんか？ なにしろ、数字や言葉や記号や数式（そういえば数式が美しいというレトリックを聞いた覚えがあります）やグラフをもちいています。

要するに「何か」の代わりに、その「何か」ではないもので済まして澄ましている」

という置き換え（すり替えでもいいです）の仕組み、つまり比喩（比喩です）の体系なのです。

まさに隔靴搔痒かっかするような（ブーツの上から足の痒いところを搔いているようなもどかしい）遠隔操作（遠くにあって手が届かないものの代わりにその辺にあるものをつかう、つまりとっても柄の長い孫の手で遠いところにあるものを突いたり動かしたりする）です。

でも、数学はレトリックだなんていうと数学にケチをつけている気配が濃厚なので、数学は修辭学であるはどうでしょう（ガストン・バシュラールみたいに詩学（la poétique）も捨てがたいです）。「数学という名の修辭学」とか「数学の修辭学」なんてかっこよくないですか？

いずれにせよ、修辭学という言葉は、数学という厳めしい字面とイメージに「限りなく」ぴったりに「見えて」きました。論理ではなく印象の問題なのです。

「思い」を「はかる」

＊

「慮る」は、「おもんばかり」と「おもんばかり」と読めて、「おもいはかる」から来たようです。「思いをはかる」と考えると分かりやすいですね。駄洒落が好きな者には「重い」や「重み」を「はかる」という連想が浮かびます。

「はかる」といえば、まっ先に頭に浮かぶのがスーパーです。スーパーは「はかる」だらけなのです。どの商品にも数やグラム数や容量が記されています。それはそうですね。お金を出して買うのですから誤魔化されたくはありません。

辞書を見ると「おしはかる・押し量る・押し測る」の「おす・推す」は「押す・圧す・捺す」とも関係があるみたいです。スーパーで、野菜やラップにくるまれた魚なんかを買おうとするときに、指で押してみるということがありませんか。商品に圧力を加えるなんて、本当はやっていけないのですが、ついやってしまいます。

「身が引き締まっていて、新鮮かな?」「中が、すかすかなんてことはないだろうか?」そんな思いにつられて、指先で押したり、触ったりしちゃいます。ちょっと後ろめたい気がします。わくわく感やどきどき感も覚えます。それが「おす・推す」なのかなとも思います。

そうそう、「重みをはかる」の「重み・重い・重さ」は「思う・思い」と語源が同じらしいという説が辞書に載っていましたが、歯切れは悪いです。

＊

思いあたることがあります。やはりスーパーでの話なのですが、よくキャベツやカボチャを手のひらに載せて「重い・重み・重さ」をはかりますね。そんなときには目を軽く閉じている人がいます。たとえ目を開いていたとしても、その目は宙を見つめているか、うつろです。

あれは、自分の「思い・思う」の中にいるときの、人の表情や身ぶりではないでしょうか。

そんなイメージというか「意味」が気に入ってしまって、このところ、そうした思いを込めて「思う・思い」「重み・重い・重さ」という言葉たちを眺めたり、つづったりしています。「おもいおもい・思いは重い」とか「おもいおもい・重い思い」なんて具合にです。

こういうのは、おふざけではなく、自分がつづっているさまざまな言葉たちの「重み・思い・意味・イメージ」の「多義性・多重性・多層性」を受けとめて楽しんでいるのです。はかっている、とも言えそうです。「はからずに・測らずに・量らずに・図らずに」、文章はつづれない気がします。

＊

一方の「わかる」には、殺伐とした印象がつきまとっているように思えてなりません。なにしろ「わかる」には「分ける・切る・割る」という動作が基本にあります。血生臭いのです。ばらばら殺人とか腑分けとかマグロの解体という言葉を連想します。痛々しいのです。「はかる」という言葉には、そうしたすさんだイメージをいまくことはありません。

「分かる」の基本的な身振りは「分ける」ですから、要するに頭の中で分けて「見ているだけ」という感じがして冷たく感じます。「はかる」は「推しはかり」、形だけでも共感し同情してくれます。見ている、そのまなざしが温かいというか、心と目の動きを感じさせる言葉です。

小学校の低学年のころに、商店街へよくお使いに行かされましたが、「はかる」で思い出すのはお肉屋さんでのやり取りです。たしか「ギュウのナミを百グラムください」とこちらが言うと、いつもコロケを揚げている島倉千代子さん（もちろん、若き日のお千代さんです）にそっくりのおねえさんが「ちょっと待ってね」なんて言って出て来て、牛肉を量ってくれるのです。母とふたりの家庭で、うちがいちばん貧しかった頃でした。

「気持ちだけ、おまけしておいたからね」という言葉が必ず返ってきて、その「気持ちだけ」という言い回しと、そう言うときのおねえさんの口調が妙に色っぽくしかも優しげで、幸せな気分になったのを覚えています。「気持ちだけ」とか「心持ち」というフレーズの響き。それが、個人的には「はかる」と結びついています。

*

時計を思わせる上皿式の秤の受け皿に、蠟をひいたような白っぽい紙に載せられた赤いお肉が見える。そこに「気持ちだけ」が加わる。すると「気持ちだけ」針が揺れる。「思い」の「重み」が揺れる。こっちの心も揺れる。秤の動きに似ていませんか。天秤やばねを利用した秤の揺らぎ。共振。ともにふれる。

昔は近郊の農家の人たちが、野菜やお味噌なんかをリヤカーに積んで住宅街を回ってきたものです。リヤカーを押したり引いてくるおばさんたちは、棹秤（さおばかり）と呼ぶのでしょうか、目盛が刻まれた棹と分銅の位置を調節しながら、慣れた手つきでニンジンやキュウリの重さを量っていました。

その仕組みが分かったのは小学校の高学年になってからだと思いますが、そんな妙な道具で重さを「はかる」ことができるというのが、不思議でなりませんでした。お肉屋さんの秤は針と目盛で「目に見える」のですが、農家のおばさんたちの秤は得体がしれなくて、なんだかいつもズルをされているような気がしました。

いまになって考えると、そのときの私は「目に見える」秤を無視して、おばさんたちの「目に見えない」思いをはかっていたのだと思います。

知ではなく痴にうながされて書く

＊

＊ふれる、ゆれる

月明かりのともる道を、ふたりの連れと歩む。空に浮かぶ丸い影、地にぼとりと落ちた影。一步一步、一刻一刻、ともに歩む。

「明かり」につられて「ともる」が来て、人が歩くにつれて付いてくるように見える「月（つき）」の連想で「連れ（つれ）」とつながり、「ふたり」を受けて、念を押すように月の「影（姿）」と地面に映る自分の「影」が言及され、ふたりの「とも（友・朋・共）」との歩みが「一步一步」で空間的な推移として、「一刻一刻」で時の刻みとして触れられる。

こんなふうに音と文字とイメージで遊べる言葉の世界が好きです。英語では無理ですから日本語の世界と言うべきでしょう。というか、それぞれの言語にそれぞれの多義語があって、そのなかで言葉を掛ける遊びがあるにちがいません。

言葉の世界と現実の世界と思いの世界は、ぴったり重なるようには一致しないが、それにもかかわらず「擦れ違う」というかたちで、触れるか触れないかの、ぎりぎりの出会いがある。そんな気がします。

触れそうになっただけなのに触れた心もちになる。相手に触れてはいないのに思わず、こちらが振れてしまう。これを押しすすめれば、気が触れることになるのかもしれない。

「気が触れる」の「触れる」は「狂れる」とも書きます。狂うのです。振れが振れを、触れが触れを、揺れが揺れをさそう。狂ったようにばらばらにふれていたのが、狂ったようにみんなでいっしょにふれるようになる。いずれにせよ、ふれているのです。

*月に触れる

月は英語ではふつう moon、フランス語では lune ですが、英語にはラテン語で月を意味する luna から来たらしい lunacy や lunatic があります。それぞれ「狂気」、「狂気の」という意味になります。

私は掛け詞のように見えたり響く語源が好きです。字面や音を楽しむわけですが、これを「正しい」知識としてとらえて、まるでたった一つの正解のように解する気にはなれません。

そんなわけで、国語辞典の語源の欄にある「〇〇が訛って」とか「〇〇か」とか「諸説あり」という自信なげな記述が好きです。

「訛って（要するに、口が回らなかった）」「転じて（要するに、間違えた）」「と解釈して（要するに、勘違いした）」「字を当てて（要するに、当て字であり感字）」というふうに受けとめています。

映り、写し間違い、移る。言葉は、そうやって移り変わってきたようです。

私は、求める解よりも迷う快を選びます。語源の解を知る喜びはタイムマシンが発明されるまで取っておきましょう。怪のままではじゅうぶんに快なのです。いまは、起源なき引用であり、現物や実物なき複製である声と文字を相手に遊んでもらおうと考えています。

*月に吠える

それにしても、なんで月が狂気とつながるのでしょうか。調べて解を求めるのではなく、迷って楽しんでみます。答えは出なくてかまいません。私には出ないほうがいいのです。「わかる」の醍醐味がゴールではなくプロセスであるように、迷う過程が楽しいのです。

満月や月というと狂気を連想する人は多いようです。やはり、lunatic という言葉の影響でしょうか。full moon（満月）と fool moon という言葉遊びを思い出しました。満月の夜に〇〇が多い——といったたぐいの都市伝説も思い出します。こうこうと輝く満月

を見ると、人も吠えたくなるのかもしれませんが。

「狂う」がらみでいうと、正気のサタデーナイ（沙汰でない）トという駄洒落を聞いた覚えがあります。確かに、夜になると人は程度の差はあれ、ふれます。とりわけ「ハレ」っぽい週末には。

こうした、きわめて多くの人、あるいはそこそこ多くの人に共有されたイメージがある場合には、詩や小説や音楽や映画やテレビドラマで、似たようなイメージが繰り返され、さらにイメージが拡散されていきます。

音楽と言えば、バンド名の LUNA SEA が頭に浮かびましたが、これは上で述べた英語の lunacy と同じ発音になるみたいです。

海の月、月の海、狂気——。こう並べると、なんだか綺麗でうっとします。「月に吠える」というフレーズを連想してしまいました。月に触れたのでしょうか。

言葉には辞書に載っている語義だけでなく、集団や共同体に共有されているイメージがあったり、おそらく一人だけにしかいだかれぬ私的なイメージがあります。後者は誰かに話せば「あほか」と言われるのがオチで——話せば話すほど正気の沙汰でない人に思われます——、他人に分かってもらう必要のないものですが、だからこそ大切なのです。

もしもカメよカメさんよ。この歌詞を耳にしたり口にするたびに、月でカメさんに電話をしているウサギさんの姿が浮かぶのですが、こども時代からいっているこの心象を、私はとても愛おしく思っています。

***ふれる、触れる、振れる**

「気がふれる」という言い回しが気にかかります。この言い回しで、「琴線に触れる」というフレーズを連想しました。

琴の金色の線（糸・弦）に何かに触れて、線が振れ、空気が震える。そんな光景が目には浮かびます。金色の線から金色の空気の波がつぎつぎと円を描いて広がっていくのです。

薄く弱いながら艶のある光を感じて見上げると、弦月半月が濃い紫の空に見えます。月は、金と銀のどちらにも見える微かな色をしています。あ、ウサギさんだ——。そう思ったとんに、夢ゆめうつつから覚めます。または別の夢ゆめうつつへとうつります。さめてもさめても夢うつつなのです。

こういうのを「狂（ふ）れる」というのでしょうか。少なくとも、この「ふれる、ふる、ふるえる」という言葉とそれが喚起する上のイメージは、私には美しいものです。

ところで、「触れる」と「触れられる」は同時に起こっているはずですが。視覚や聴覚や嗅覚や味覚と異なり、触覚は双方向的なものです。それだけに五感のうちで最も始原的な体感に思えます。知とはほど遠い感じ分けなのです。「触れる」は正確には「触れ合う」と言うべきかもしれません。

人同士の——相互的な——触れ合いの話に絞ると、体が二つない限り、人はどちらか一方なのですから、相手のことは想像するしかありません。

つまり、相手にとっての「触れる、同時に触れられる」は、体感できないという意味で抽象になるわけです。他者を前にして（相手にして）、人は想像し抽象するしかないということでしょうか。想像の「像」と抽象の「象」は影です。「他者を相手にする」とは影を相手にするという意味での「触れ合い」だと考えられます。

自分ではない「何か」や「誰か」、自分ではない相手——人であっても、人以外の生き物であっても、無生物であっても、なんらかの現象であっても——を思いやるとき、人は「それ」に触れた気持ちになるという意味で、触れる（狂れる）のではないのでしょうか。触れるは狂れる。

***知ではなく痴にうながされて書く**

月の影を見る。星の影を見る。

水面に映った星や月の姿ならじっさいに見た覚えがありますが、地面や壁に星や月の影が映っているさまは見たことがありません。でも、見たことはなくても思いえがくことはできます。

強いて思いの中で描かなくても、月の影、星の影と唱えただけで、浮かんでくるのです。まだまだ月のひかりや星のあかりのさすさまは浮かんできません。

ひかりやあかりという意味での影は、まだまだ私の中では知識でしかないようです。

＊

暗い道に星の影が落ちている。青みを帯びた灰色の影がぼつぼつと点になって散らばっている。壁に大きな月の薄い影が映っている。このあいだ見たときにはまん丸だったのが、きょうはちょっと欠けている。

現実にはありそうもありませんが、このように思いえがいたり思いうかべることなら楽にできます。星の影と月の影を、自分にとっての「文字どおり」に取っているわけです。

天体の影といっても、現実にある日食や月食など「食（蝕）」の話ではありません。科学的事実とも呼ばれる、知識として学ぶ「食（蝕）」の話よりも、現実にはありえない、荒唐無稽であったりとりとめのない個人的な影のイメージのほうに、私はわくわくします。

この「わくわく」がないと私は文章が書けません。学校で学習した地動説よりも、日々体感している天動説にわくわくを覚えると言え、わかっていただけるのでしょうか。私はこの感覚を夜の思考と呼んで大切にしています。これがあるから生きているようなものです。

なお、私は地動説を否定しているわけではありません。そもそも否定できるほど知的な人間ではありません。

このところ投稿している記事は、どれも「知る」という「知」ではなく、「痴（し）れ

る」という意味での「痴」にうながされて書いています。きっと私は痴人なのでしょう。
「痴人夢を説く」の痴人です。

正方形と長方形で悩む夜

＊

印象やイメージの話ですが、長方形や直方体は親しみやすくカジュアルに感じられ、正方形や立方体は正式というか格式張って感じられて身構える自分があります。そもそも角（かど・かく）があるものは人がつくったから、そうなっている気がするのですが、角があるほうが測りやすく細工がしやすいのではないのでしょうか。

家屋や建物一般が直線と四角で成りたっているのも、測りやすかったり、作業がしやすかったり、運びやすいからであり。建設とか建造とはそうした行為の繰り返しであり組み合わせなのかもしれない。そんなふう想像します。

＊

四角四面なんて言い方は正方形を意識している気がするし、英語で正方形を意味する square には堅物という語義もあったりします。立方体の箱をかかえて電車の席についている人を思いうかべてください。その中身がすごく気になりませんか？ まして白だったりすると……。一方で、赤と白と混じった箱なら笑みが浮かびそうです。

包装された直方体の箱をもらったと想像してみてください。文庫本くらいの大きさです。ふつうにわくわくしませんか？ ふつうにうれしくありませんか？ これがもう少し小さめの立方体の箱だったらどうでしょう？ 「何だろう？」と身構えてしまいませんか？ ちょっと怖い気もしませんか？ すごく高価なものではないかと期待するかもしれません。

いずれにせよ、立方体だと大切なものが入っているようで緊張感が漂います。長方形や直方体は手や腕でかかえるのには持ち運びやすいですが、正方形や立方体は個人的にはやや持ちにくい気がします。この形の荷物を運ぶ人は大変でしょう。形は整ってきれいですが、人の体にはなじまない形状なのかもしれません。

たとえば、近所の道を歩いていて、宅配便の業者さんが立方体の箱を胸のあたりでかかえていたとします。二度見しませんか？　あるいは、ピンポンとあなたの家のドアチャイムが鳴って、そこに立っている宅配便会社のお兄さんが立方体の箱を手にしていたとします。家族に届いた荷物なので、あなたは中身が分かりません。伝票に印鑑を押す、またはサインするときの手が小刻みに震えませんか？

＊

あと、これまた個人的な意見で恐縮ですが、立方体の部屋は落ち着きません。縦横そして高さが同じ長さの部屋にいる自分を想像すると緊張感を覚えます。長時間いれば精神的におかしくなるのではないかとさえ思います。私の場合には、これ以上おかしくなると困るのです。

古いお寺や社（やしろ）にほぼ立方体のものがあつた記憶がありますが、いかにも厳めしいし、中には絶対に入れないとか、見てはいけないものが入っているように考えてしまいます。そうそう、御神輿（おみこし）の豪華な屋根を取ると立方体っぽくないですか。いまでは見かけませんが、井戸も正方形だった記憶があります。そもそも「井」の字がそうですね。

もし立方体の建物があつたとしたら、きっと敷居はまたぎにくいだらうなあと思像します。直方体の建物なら気楽に入っていける気がします。ふつうなのです。

＊

なんと言っても部屋は、立方体をほどよく直方体にした感じがいちばん落ち着くのではないのでしょうか。長細すぎる部屋だと廊下みたいで違和感を覚えるにちがいありません。要するに、床と天井と壁が適度に長方形の部屋のほうがしっくりくるし、居心地がいいのだらうと思います。げんに、いま私がいる居間がそうです。

この部屋は和室なのですが、引き戸も長方形、サッシの窓も長方形、あと壁のカレンダーも、テレビとそのリモコンも、テーブルも、パソコンの画面も、ティッシュの箱も、本も新聞も棚も枠に収めた写真も、ぜんぶ長方形です。あ、畳を忘れていました。目につく正方形は座布団とカーペットくらいです。

寝るためにつかっている部屋もそうです。ベッド、シーツ、布団、枕、エアコン、エアコンのコントローラー、たんす。そして天井の羽目板が長四角です。夜は小さな電球の明かりのもとで寝ているのですが、目を開けると眼鏡を外した目にぼんやりとその羽目板の様子が覚えて安心します。見慣れているからでしょう。

いま私の寝る部屋は亡くなった母の寝室でした。最期の母は長方形の枠から立方体に収められ、つぎに立方体に収められて帰ってきました。短期間ですが施設にいたのです。

その立方体の中の母は球体だとイメージしています。その球体もまた器なのだと思います。人はなんらかの器に収まっているという意味です。そう考えると安心します。

こんなとりとめのないことを考えながら夜を過ごし、眠りにつこうと努めるのが日課になっています。

あ、そういえば、夢の中では長方形とか正方形とか円形とかを意識したことがない気がします。形があるはずなのに形として見ていないのです。たぶん……。いや、どうなのでしょう。よく覚えていません。

いったん考えだすと気になります。このあいだは、自分の夢に文字が出てこないという発見があって興奮したばかりなのです。なんだかわくわくしてきました。今夜は夢を見るのが楽しみで眠れないかもしれません。

夜になると「何か」を手なづけようとする

＊

人は長方形に囲まれて生きている気がします。生まれたばかりの赤ちゃんは、囲いというか長方形の枠の中にいます。そのあともたいていほぼ長方形の枠の中にいつづけます。家、建物、道路、乗り物、PC、スマホ……。

人が亡くなると長方形の棺という枠に入ったまま長方形の炉という枠の中でくべられ、骨壺（これを入れる箱は縦に長細くないですか？）とか墓という枠に収められます。めっちゃくちゃ言ってごめんなさい。

人は自分（あるいは自分の中にあるもの）に似たものをつくり、しだいにその自分のつくったものに似てくる、似せてくる、とつねに感じているのですが、人は「自分のつくったもの」に「自分もどき」を見て初めて、「自分そのもの」に気づくのではないか、なんて考えてしまいました。

そのひとつが長方形の枠ではないでしょうか。

＊

長方形というと、ひとりである場所をイメージしてしまいます。上で述べた長方形の場所や「容れ物」ではひとりでない場合のほうが多いのにです。たぶん、多くの人に囲まれていても人はひとりであるという気持ちが強くあるからだと思います。

寝床、ベッド、布団、病床、シーツ、ストレッチャー、トイレの個室、棺桶、お墓、遺影。こうした場や容れ物にひとりである人が頭に浮かびます。誰かに似ていますが、想像の中にあるその顔は見えません。見たくないのかもしれませんが。

意識だけとか目だけになって道を進むさまが、寝入り際によく浮かぶのは車に乗っている時を思いだしているのかもしれませんが。道は、たとえそれが獣道であっても、舗装された道路であっても長方形を延長していったものに見えます。

テレビにしろ、映画にしろ、液晶画面にしろ、本にしろ、車窓にしろ、枠があり、その枠はほぼ横に長い四角に見えます。視界もほぼ横長の楕円形に思えます。その横に長い長方形の枠のある光景を見ながら、人は生きていく。そのあいだに枠を意識することはまれにしかない。

こういうのはこじつけなのでしょうが、こじつけというAをBに置き換える作業が、視覚や知覚全般の根底にあり、たとえば言語活動や広義の比喻や印象やイメージという形で、人においてあらわれているのだと思われます。目だけでなく、また意識だけでなく、魂の働きだという気もします。無媒介的に世界と触れあうことができない以上、人間は置き換えるという形で遠隔操作するほかないのです。

＊

外に出て、海、山、川、草、木に目を転じると意外と長方形や四角がないのに気づきます。長方形が見えるなあと思うと、たいてい人がつくったものなのです。そうしたものは角があるのです。

やっぱり長方形は人の中にあるのではないかとますます思えてきます。「川は道と同じで長方形を延長していったものに見えるよね」と言ったあなたに四角い座布団一枚。

空を見ても長方形は見当たりません。楕円形っぽい長方形にも見える視界の枠が感じられるだけ。お日さまも雲たちにも、お月さまも星たちにも、角というものが無い。

自然の風景を窓や写真やスクリーンや画面という枠の中でしか見なくなっていることを寂しく思います。

＊

こじつける。こじつけ。

「何か」を「何か」に置き換えないと人は壊れしまうのでしょうか。前者の「何か」はあえて言うなら恐怖であり不安でしょうが、本来は言葉にならないはずのものです。後者の

「何か」は言葉に近い「何か」であり、人にとっては親しいものにちがいません。

名づけられないものを手なずける。こうした仕組みがあることに感謝するしかない、そんな敬虔に似た心もちになります。

そう、感謝すべきなのでしょう。生きていくこの仕組みに不調が起きる場合がままあるからです。そうすると人生はつらく苦しいものになりますが、年を取ったいま、それが身にしみるのです。

目をつむると、とりとめのない模様や景色に置き換わった何かが浮かんでいます。それが何かなんて考えないでその光景に染まっていくと心が安らぎます。名づけられない「何か」にはそうした効用もあるようです。有り難いことに。

「何か」ではないもの——こう名づけた瞬間にもう「何か」なのかもしれませんが——と「何か」のあいだで、私はいま「何か」を、こうやって言葉とイメージに置き換え、手なずけ、飼いならそうとしているにちがいません。

きっと怖いからです。不安だからです。間違いありません。いつか必ず来るはずの「何か」に備えて心の準備をしているのかもしれません。

夢にうつるまでのあいだ

＊

初めて目にする影、初めて鏡を覗きこむ、初めて覗くカメラのファインダーの像、初めて写真に見入る——。思いつくままに並べたフレーズですが、どれもが「うつる」と関係あります。影に映る、鏡に映る、ファインダー越しの眼に映る、写真に写る。

こうした「うつる」を生まれて初めて体験したさまを想像すると、ぞくぞくしてきます。イメージが氾濫して気が遠くなりそうになります。「うつる」ほど始原的な身振りはない気がするからです。

口で「ふくむ」や、何かに「ふれる」、そして「きこえる」に加えて、生まれて間もない赤ん坊が経験する初めての身振りのひとつに「うつる」があるのではないかと想像します。

視覚的な「(目に)うつる」、つまり「みる」「みえる」だけにとどまらず、距離を体験する「うつる」もありそうです。要するに移動のことなのですが、「うつる」には距離が不可欠だと思われます。その距離とは、具体的なものであったり抽象的なものであったりする気がします。

こんなややこしい理屈は赤ちゃんには知るよしのない話ですから、もと赤ちゃんである、大人のたわごとにはすぎません。赤ちゃんも、もと赤ちゃんのあいだにも、抽象的な意味での距離がありそうですね。

＊

ここからあそこへうつる。これをあれにうつす。あれがこれにうつっている。わたしがあなたにうつる。あなたがあのひとにうつる——。寝際にこういうふうに言葉を唱えるのが好きです。わくわくもします。熱中すると、眠りに入れなくなる恐れがあるので気をつけなければなりません。

いま並べたフレーズを漢字をまじえて唱えようとする、とたんに難しくなります。文字が介入することで考えこむからでしょう。意味を分けなければならないからです。写か映か移か遷か、分ける——。音だけならイメージで唱えていればいいのに、漢字をまじえると邪念が入ります。漢字の字面の厳めしさに緊張もします。

昼間は邪念と緊張だらけのうつつ（現実）で生きているのですから、寝入る時や、夢の中ではせめてリラックスして自由でいたい。曖昧で荒唐無稽で、何でも肯定されるのが夢。夢は肉親以上にやさしいかもしれません。何でも肯定されるとはいえ、何でも受け入れてくれるわけではありません。夢は一方的に展開するのですから。

当たり前ですが、覚めたり醒めているわけにはいかない夢。それとは対照的に、漢字には覚醒させる力がそなわっている気がします。漢字を見ていると、なんか、こう、しゃきっとするのは。幸か不幸か、私の夢には漢字が出てきません。文字自体があまり出てこないのです。言葉が出てきても、音だけ声だけみたいなのです。よくは覚えていないのですけど。

これもまた当たり前の話ですが、ラジオには文字が出てきませんよね。夢の中の言葉はそれと似ています。視覚的でもある夢ですが、夢で文字を見た記憶はあまりありません。たぶん個人的なものだろうと思われま。

＊

ゆめをうつす、ゆめにうつる、ゆめがうつってくる、ゆめへとうつりたい、ゆめうつつからゆめにうつる、なにかがのりうつるのがゆめ、うつってくるのはゆめかもしれない。

（試しに、漢字を出してみます。ゆめにうつる、夢に移る、夢に映る、夢に写る……。どれも言えるような気がするけど、どういう意味なのだろう、そもそもどんな状態なのか？ やっぱり、頭がさえてきて眠れそうもありません。）

眠りと夢にうつるまでのあいだが寝際ですが——夢を見ないこともあるでしょう——、寝際には辞書も用字用語集もつかえないし、ネット検索もできません。これまで生きてきた言葉との付き合いがあるだけ。その付き合いすら、そこではうつりつつあり、うつ

ろです。とりとめのないイメージの断片の浮遊と、記憶との対話があるだけの、ゆめうつつ。

こうした心境は死に際にもありそうですね。もちとん頭と体の状態次第です。その時まではできるだけ元気でいたいですね。いい体調で臨みたいものです。まさか、それは贅沢というもの。かなわない夢であることはまちがいなさそうです。

架け橋

＊

「ここはどこ？」という叫びやつぶやきは、場所を尋ねているのではない気がします。そういう言葉を発する人を見ていて、「ここ」も「どこ」も場所を指しているのではなく、まして場所を指す名前と置きかえられるものでもないと感じました。

施設の名称、その施設のある町名、おおざっぱにどこどこと教えたところで、納得する気配はありません。何度も何度も「ここはどこ？」と言います。あれは尋ねていたわけではない、といまになって思います。

だいじょうぶだよ、僕はここにいるよ、うんうん、ご飯食べた？、おいしかった？、何か欲しいものある？　こんなふう言葉をかけてやるほうが、安心はしないまでも、険しい表情がやわらぐような気がしました。気がしただけです。

あっちがどう思っているのかは、ぜんぜんわかりませんでした。いまとなると、もうわかるすべがありません。あのときにはあっちとこっちのあいだに掛かる橋があったのに、いまはないのです。

手を握ってやる、頭を撫でてやる、指をさすってみる、肩に手を置く、吸い口を唇に当てて飲むかどうか見てみる、足に触れる、鼻が触れるくらい顔を近づけてほほ笑んでみる。

声を掛けるだけでなく、何らかの動作をして相手に触れるほうが、相手のおびえた目が落ちついたような記憶があります。ほかの人のことは知りません。こちらは初めての経験でとまどうばかりでした。

＊

自分がどこにいるのかは自明なようで不明な気がします。物理的にどこにいるかさえ不明に感じられるのは、自分でも危ういと思うのですが、よく考えます。考えずにはいられないのです。

知識や情報として知っていることが物理的な場所なのだとすれば、自分が気になっている「ここ」は、町名や番地として知っている「ここ」ではありません。

目を二秒ほどつむってみてください。次に目を開けてまわりを見てみてください。自分のいる場所を確認するつもりでよくみてください。

たぶんあなたはPCかタブレットかスマホの画面にうつったこの文章を読んでいると思います。目はつむらなくてかまいませんから、この文章に目を向けたまま、自分のいる場所を思いえがいてください。思いだすとか、思いうかべるでもいいです。

その思いえがいた場所か風景か映像みたいなもの、それが私の気になっている「ここ」なのです。誰かに教えられた町名や番地という数字や建物の名前や「居間」「台所」「待合室」「電車内」「車内」ではなく、いまのあなたの頭のなかにある「ここ」なのです。

あなたはこの文章のなかにながら、あなたのいるまわりを思いえがく。あなたはどこにいるのでしょうか？ またはゲームでも YouTube でもいいです。動画や音楽のなかにある「ここ」にいるあなたは、同時にあなたのまわりにある「ここ」にいるのでしょうか。

自明であるはずの「ここ」が不明に感じられませんか？

*

こういう説明しにくい微妙な話ができる友達がいないので話したことはなく、あなたにつたわっているか心もとないのですが、私のいう「ここ」とはそういうものなのです。そもそもそれが場所であるのかさえ不明なのです。

夜寝入り際に、目を開けて視界に見える範囲内の寝室を見まわし、見慣れた場所であることを確認し、安心して眠りに入りそうになりながら、いたずらな気持ちが起こって

目を閉じ、いまいる寢室を思いえがくことがあります。目を開けたり閉じたりして遊ぶのです。

そんなときの心境は、あえて言葉にすれば「ここ」と口にすることで十分なのです。ほんとうは「ここ」という言葉も不要なのです。「どこ」なんて思いはないのです。それを「ここはどこ？」と言わせるのは、そばに誰かがいる気配を感じるからだと思います。誰かがそばにいないときには「ここはどこ？」とは言わない気がするという意味です。

場所は人と人のあいだで立ちあらわれる虚構ではないでしょうか。虚構とは掛け橋です。相手がいて掛かる橋なのです。架空の橋、空（くう）に架ける橋、架け橋。「ここ」はそれだけで完結しています。誰かの気配を感じたとたん、「ここ」は「どこ」になります。「ここ」を見ている目を感じたとたん、「ここ」は「どこ」に変わるとも言えるでしょう。

相手の気配が「どこ」を誘いだすのです。

虚構とは距離を置いてながめることだという気がします。架空の橋、空（くう）に架ける橋、架け橋。距離が生まれることで動きも生まれます。それが場であり物語ではないでしょうか。「ここはどこ？」は場所という物語の出だしなのです。「むかしむかし」というおまじないのような言葉と同じく、距離つまり隔たりをつくり、動きがはじまるという合図なのです。

「ここ」から「どこ」へとつづく橋、それは人と人をつなぐ掛け橋でもある気がします。

寝入り際の思いのなかで、こんなふう場所に言葉を口に、場所について考えはじめるととたんに目がさえて眠れなくなります。「ここ」より先には行かないほうが眠れそうです。いまでは向こうに行ってしまったあの人も、あのころはそんな「ここ」にいたのではないかと想像せずにはいられません。

夜の思考

著 星野廉

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
